'86 海外遠征資料
(参考物件)

北京蒼天　棍球親善

(中華人民共和国親善訪問試合報告書)

学習院ホッケー部

(1980.8.3～11)

目　　次

記 録 写 真

中国との親善試合を祝う…… 自由民主党総務会長　二階堂　進 …… 1

地　図 …… 3

日　程 …… 4

経 過 報 告…… 6

中国雑感 ……東洋文化研究所所長、団長　飯坂　良明 …… 8

中国の顔、そして舞台 …… 法学科３年　外山　寛実 …… 10

北京友誼商店 …… 心理学科３年　津賀　保宏 …… 12

北京体育学院 …… 経済学科３年　後藤　敏夫 …… 14

万里の長城 …… 法学科４年　安養寺　透 …… 15

遙かなる大地への想い …… 主将・経営学科４年　高井　通昌 …… 17

文化のにおい …… 経済学科２年　増田　卓郎 …… 20

心情への訪問 …… 経営学科４年　盛　正樹 …… 21

うたげの中の片想い …… 主務・経営学科３年　高橋　直 …… 23

緊張の第一戦 …… 法学科２年　青木　慶次 …… 27

紅姿舞う第一戦 …… 経営学科３年　吉岡　聡 …… 29

切れた糸は暗を結う(第二戦)‥ 副務・法学科３年　高木　和彦 …… 31

第三戦（内蒙古にて）…… 副将・法学科４年　菊地　誠 …… 33

最後の闘い（第四戦）…… 経済学科２年　増田　卓郎 …… 37

高等科初の国際試合 …… 高等科３年　一柳　直宏 …… 39

留学生寮の女性と少年 …… 高等科２年　水谷　吉男 …… 41

壊かしの北洋汽水 …… 高等科２年　小沢　博人 …… 43

芸能部長から見た中国 …… 高等科２年　汲川　隆信 …… 45

プッシュ・イン …… 高等科２年　小田　洋彰 …… 46
迷子なりそこない記 …… 高等科２年　若松　　健 …… 48
脇道を通りすぎた後に …… 副務・心理学科４年　浜本由美子 …… 50
自業自得 …… 副務・独文学科２年　濱口　孝文 …… 52
王昭君そして大蒼原 …… 総主事　横溝　宏昌 …… 54
出発（たびだち） …… 主　事　竹口　友章 …… 57
私のみた中国 …… 奥寺　道彦 …… 60
管見記 …… 副団長・監督　飛田　　孝 …… 62
中国遠征で得た事 …… 小林　　進 …… 65
我チームの闘い …… 副監督　野崎　博典 …… 67
ひとりごと …… 浜本由美子 …… 70
留守居役のタメ息 …… 遠征最高顧問　溝口　泰男 …… 71
あとがき …… 副団長・監督　飛田　　孝 …… 74
主旨書及び団員名簿 …… 76
中国あて公文 …… 78
ホッケー協会申請書及び回答 …… 79
試合記録 …… 80
新聞記事、招待券（内蒙古） …… 84
援助者名簿 …… 85
決 算 書 …… 87
編集後記 …… 88

遠征前の強化合宿。小林，高橋先生，FHMCの皆さんと。成果の程は？

東京駅にて。高橋先生，OB，家族，マネージャーの見送りを受けて。
希望に胸をふくらませ出発!!

中国の舞台，天安門広場で。後方に見えるのは天安門。

第　3　戦

入場式。後方の観衆２万。

第　3　戦

後半28分．PC高橋のシュートゴールにつきささる。（ストッパー盛）

第　3　戦

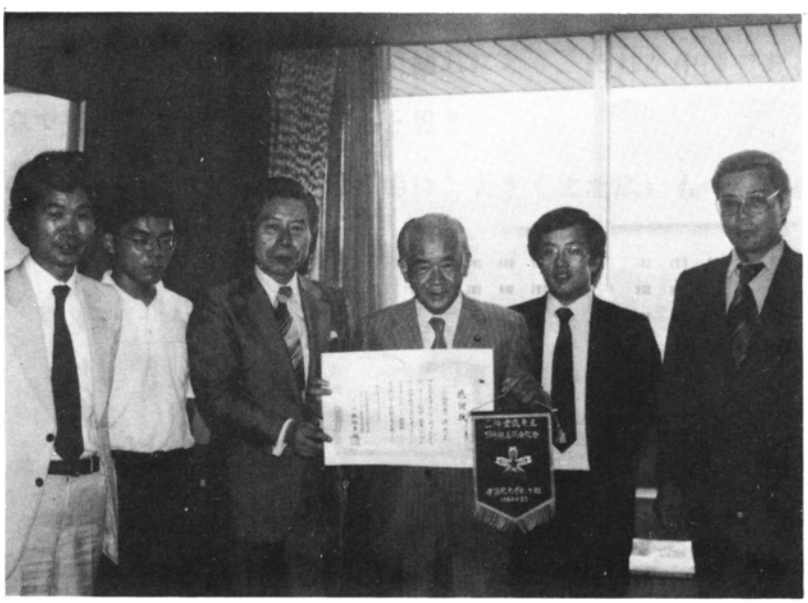
宣伝カーによる前売券の発売風景。スピーカーのボリュームをあげ
市内を走る。呼和浩特市初の国際試合。

第　4　戦

ユニホーム交換後副主席を囲んで。黒・内蒙古チーム，白・学習院チーム
（モンゴル語，中国語，日本語で書かれた横断幕に注意）

北京体育学院戦試合後の交歓，笑顔のひととき。

中国大使館帰国表敬訪問。代理大使を囲んで。



二階堂先生帰国表敬訪問。

中国との親善試合を祝う

自由民主党総務会長　二階堂　進

4月の末に、溝口君がホッケー部の諸君を連れ、中国と親善試合を行いたいと云ってきた。単独チームで訪中することは例のないことだが、学生諸君がスポーツを通じ友好を推進するのは、これからの日中関係に、極めて意義深いものがあり、中国政府にお願いしたところ快く引受けてくれた。

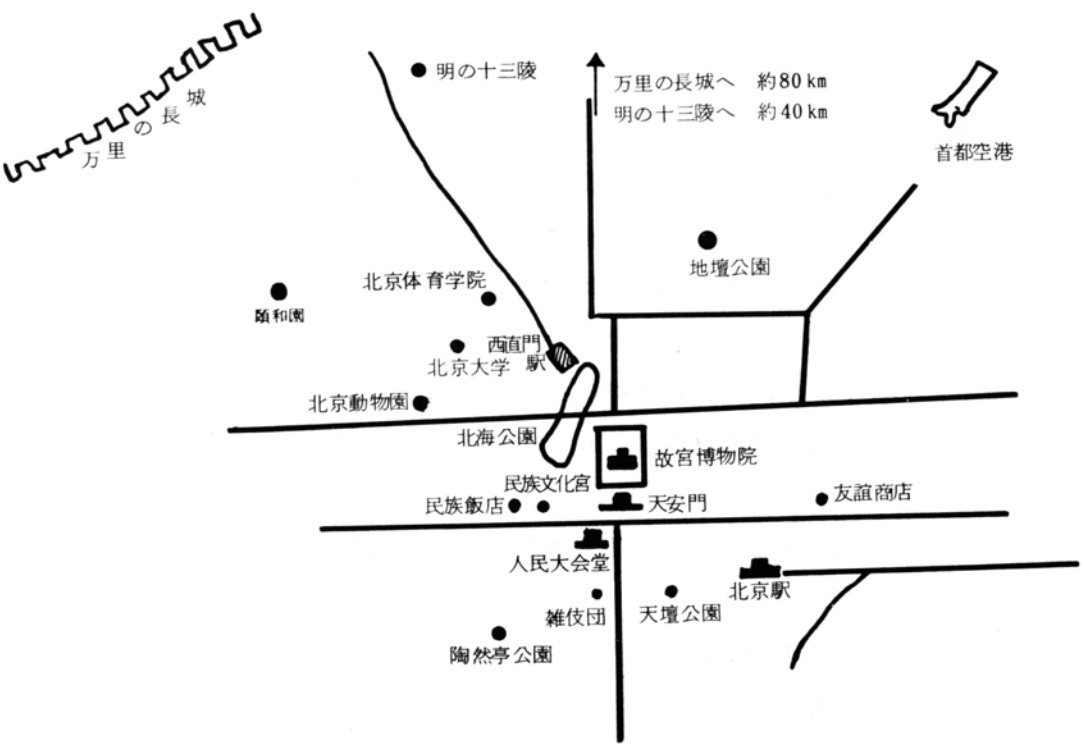
先日飯坂教授、溝口・飛田・竹口君等があいさつにみえ、身に余る歓迎を受け感動したと云ってきた。特に内蒙古では、2万人の大観衆を前に堂々と闘い、敗けはしたものゝ友好の一翼を担い、また若い眼で中国を十分理解してきたと聞き、嬉しく感じている。

自分も南カルホルニア大学に留学したことがあり、これがその後の成長の糧を得るに大いに役立っている。したがって若い頃に外国へ行き、学び見聞を広めることは大事なことである。しかも若い諸君にとり、それが中国であることはあらゆる点で実に貴重な体験であったと思う。

これからは、諸君の時代でその活躍の場は、大きくまた広いものがある。

ホッケー部の発展を期待している。

モンゴル人民共和国
長春
呼和浩特
北京
天津
黄河
上海
揚子江


万里の長城
明の十三陵
万里の長城へ　約80km
明の十三陵へ　約40km
首都空港
地壇公園
北京体育学院
頤和園
西直門駅
北京大学
北京動物園
北海公園
故宮博物院
民族文化宮
民族飯店
天安門
友誼商店
人民大会堂
北京駅
雑伎団
天壇公園
陶然亭公園

北　京

北京概念図

日　　程

8月2日　（雨）

東京駅18時10分発にて成田へ向う。

高橋先生、渡辺(広)、内藤、熊野(修)、女井、井上、大谷各ＯＢ及び父兄多数の見送りを受ける。

成田市内に宿泊（成毛屋旅館）

8月3日　（雨）

9時30分発（ＪＡＬ－７８１便）で北京へ向う。12時40分（現地時間）北京空港着。（晴）飯坂、森沢、竹口さんの見送りを受ける。

中国ホッケー協会副秘書長、北京体育学院院長秘書、于再清、範玉明氏他の出迎えを受ける。専用バスで北京体育学院留学生宿舎に到着。16時より中華全国体育総会儀典長、ホッケー協会会長等と日程等の打合せを行う。

17時より北京体育学院内のホッケーグランドで練習。北京体育学院留学生寮宿泊

8月4日　（晴）

午前、北京市内の北海公園（清の歴代王朝の御苑）、天壇公園（明、清朝の皇帝が五穀豊穣を祈った祭壇）を見学。

12時より北京烤鴨店において、陳先体育総会副会長主催に出席。ホッケー協会、北京図書館へ記念品を贈呈。15時、北京体育学院副院長より学院についての説明を受ける。北京体育学院へ記念品を贈呈。

16時より北京体育学院ホッケーチームと合同練習。

8月5日　（晴）

午前、天安門広場、故宮博物院（明、清朝の皇城の中心、旧紫禁城）を見学。

16時より内蒙古代表チームと対戦（北京体育学院グランド）２－７で敗れる。北京体育学院留学生寮宿泊

8月6日　（晴）

午前、友誼商店で買物。

14時、飯坂先生、飛田監督、竹口主事は趙撲初中日文化交流協会副会長を表敬訪問。

16時、北京体育学院チームと対戦（北京体育学院グランド）。

０－３で敗れる。

夜、北京雑伎団（手品、曲芸など）を見物。北京体育学院留学生寮宿泊。

8月7日　（晴）

7時40分、中国民航機で呼和浩特市へ出発。

9時、呼和浩特（フフホト）空港着。内蒙古自治区体育総会会長他の出迎えを受ける。バスで宿舎の呼和浩特賓館へ向う。15時より内蒙古自治区人民政府金海如秘書長主催の歓迎宴に出席。呼和浩特賓館宿泊

8月8日　（曇のち晴）

午前、騎馬民族の馬術を見物した後、市内の百貨店で買物。

16時、内蒙古代表チームと対戦（大馬路体育場）１－４で敗れる。続いて高校生を加えたチームでエキジビションゲームを行う。

０－５で敗れる。呼和浩特賓館宿泊。

8月9日　（晴）

午前、王昭君の墓、五塔寺（ラマ教）を見学。

12時10分、北京へ出発。13時、北京空港着。バスで市内へ。

途中、友誼商店で買物。民族飯店宿泊。

8月10日　（曇）

午前、万里の長城（八達嶺付近）を見学。続いて午後、明の十三陵（13代にわたる明朝皇帝の廟墓）へ。定陵（地下宮殿）、定陵博物館を見学。

19時より民族文化宮で歌舞を鑑賞。

8月11日　（雨のち曇）

午前、北京動物園、頤和園（清朝の夏季の離宮）を見学。昼食後、バスで北京空港へ。

16時20分発（ＪＡＬ－７８２便）で成田へ。21時30分　成田空港着。

23時30分　東京シティーエァターミナルで解散。

主なる経過報告

2月29日　海外試合について、学生及びＯＢで相談。

3月5日　訪問先を中国と決定。

3月13日　予算、出発までの日程について検討。

4月8日　溝口さんの紹介により、二階堂進先生のお力をいただけることになる。

4月23日　二階堂先生を訪問し、訪中について御尽力をお願いする。我々の主旨を快く了承して下さる。

5月5日　運営委員上田さん、黒川さん宅訪問し、賛同を得る。

5月14日　二階堂先生秘書竹内氏及び、溝口さん中国大使館の楊振亜一等書記官を訪問し、基本的な了解を得る。

5月21日　訪問日程を8月3日～11日までに決定。業務分担（強化、庶務、折衝）を決める。

5月30日　運営委に経過報告し、了解を得る。

6月6日　中国大使館から、次の回答がある。

・中華全国体育総会及び、北京体育学院の招待とし、中国チームと親善試合を3回程度行う。

・日程及び団員等の構成については学習院の希望通りとする。

6月9日　広報、記念品、事務手続等を決定。

6月11日　飯坂先生、溝口さん、ＯＢ及び学生で協議し、選手団構成、日程等を決定する。

6月13日　大学学生課へ遠征計画書提出。

6月22日　町尻会長に、経過及び遠征方針について報告し、最終了解を得る。

6月23日　日本ホッケー協会に遠征承認申請をする。

7月2日　町尻会長より、援助金（1口1万円）を仰ぐことを指示される。

7月9日　大学及び高等科から遠征許下を受ける。

7月1日～7月19日　この間訪中費用捻出の為、学生アルバイトをする。

7月20日　練習再開

7月24日　強化合宿を行う

宿　　舎：代々木青少年センター

グランド：明治大学グランド

練習相手：明治大学、FHMC、若手OB

7月28日　結 団 式

7月29日　強化合宿終了

査証申請

7月31日　全ての準備完了

8月2日　出発

8月11日　帰国

8月21日　二階堂先生帰国表敬訪問

8月22日　解団式

9月1日　中国大使館帰国表敬訪問

中　国　雑　感

東洋文化研究所所長、団長　飯坂　良明

1980年8月初めの10日間、学習院大学のホッケー・チームは中国大陸に親善試合におもむいた。海外にわが大学のチームを送るというのは、並大抵のことではない。そのためには大きなビジョンと、強固な決意と、そして惜しみない援助や協力が不可欠であった。しかもこのすべてを用意してくれたのが、50年の伝統を誇るわがホッケー部を愛し、これに連なる多くの先輩諸士であった。現役の学生諸君だけだったら到底こうしたことが実現する筈はなかった。だからこのチーム派遣は、先輩が後輩に与えてくれた最大の贈り物だったといってよい。

中国といえば、面積にして日本の約25倍半、人口にして9倍という途方もなく大きな国である。地球人口4人に1人が中国人であるということになる。したがってこれからの世界を語るとき、よきにつけあしきにつけ中国を抜きにして語ることができない。それはあたかも車を抜きにして現代社会を語れないのと似ているといえよう。

今回の訪問は主として北京とその周辺であったが、3日間だけは内蒙古自治区の首都フフホトにおもむいた。試合は北京で2回フフホトで2回の合計4回であり、試合結果はわがチームは善戦したにもかかわらず全敗であった。当方は技術面で勝れていたとはいうものの、脚力とスタミナに関しては、到底その比ではなかった。5年の浅い歴史しかもたないとはいうものの、中国はいわば十億からよりすぐった選手、我が方は一大学数千の中から集った二十人ばかりであって、それにしてはよくやったと誉めてやらなければならないであろう。

訪問の目的は試合もさることながら、双方のチームによって代表される日中両国民の友好親善と相互理解の促進であった。この後の方の目的は思いのほか十二分に達成されたのではないかと訪中した今回のわれわれ一同は自負している。

またわれわれ日本人として、そしてとくに若い学生諸君として、こんどの訪中は多くの学ぶべきものを与えてくれたといってよい。自然と文化と歴史と人

間のスケールの大きさは、延々と連なる内蒙古の草原や万里の長城や、広大な規模を誇る紫禁城や明の十三陵や、そして我々の接した多くの中国の友人の悠揚せまらさる大人の相は、島国に跼蹐(きょくせき)するわれわれ日本人のあくせくしたさまを無言のうちにも指摘するかのようであった。

けれども同行した若い日本の学生諸君は、中国の気宇広大なる霊気をその若い胸に心ゆくまで吸い込んで、自らの人間性の一部としたことであろう。「まなかいに世界をおさめ」と院歌にあるが、まさに世界に接するとの感を深くしたにちがいない。今回の訪中がこれからの諸君の視野と人間性に創造的な衝撃をもたらし、その魂を根底からゆさぶるような強烈な印象を刻印することによって、新たな人間の誕生を可能にすることを念願するものである。

私はもち帰った大理石のレリーフに敦煌の芸術の余香を味わい、王昭君をかたどる白磁の女人像に、佳人の悲哀を感得している。しかし、それにもまして私の心に温かな人の情をかみしめさせるのは、ほんのわずかのときをさいて北京の一隅に訪れた中国随一の書家にして日中文化交流協会の副会長をしておられる趙撲初先生から頂戴した色紙の流麗なる墨跡である。先生は中国仏教会の代表であり、海外における宗教と平和の国際会議で何度か御一緒したことがある。美わしくもさわやかなその筆跡は次の文字となって流れる。

一言芬若桂　　（一言のかおり桂のごとく）
四海気如蘭　　（四海の気蘭のごとし）
　1980年8月6日
飯坂良明先生留念

撲初

中国では、先の曲がったホッケー用のステッキを曲棍といい、したがってホッケーのことを曲棍球という。1メートルにもみたない曲棍が、数千粁をへだてた日中両国民の架け橋となった。それを可能にしたのは善意と友情と平和への願いであった。こんどのホッケー・チーム訪中の意義といえば、そんなところにあるのではなかろうか。

中国の顔、そして舞台

法学部法学科3年　外山　寛実

8月5日晴、午前9時出発。中国の生活は3日目。周りの風景も大分見慣れてきた。北京は中国の顔である。その表情はどうだろうか。

市内に入るまでは長閑な農村風景が続く。我々のバスはトラックやトラクター、馬車を追い越しながら進む。その度に騒々しくクラクションを鳴らす。すると「何をそんなに急ぐのだ。」と言わんばかりにゆっくりと道端に寄る。荷台には眠っている人。道端にしゃがみ話し込む老人。並木の向こうには水田や畑が続く。

30分程で市内に入る。さすがに人もバスも自転車も増える。どのバスも満員に近い。近代的なアパート、大きな建物が目につく。又盛んに、アパートや工場を建設している。道幅は日本に比べるとかなり広く緊急時には飛行機が離着陸ができるという。さらに進むと政府関係の立派な建物も現われてくる。その反面、土砂を積んだトラックの上で寝ている人がいたり、歩道の端に山のように積み上げた野菜を売り買いする人々がいる。こんな風景が北京が中国の首都であることを忘れさせてくれる。

急速な変化をしつつある中国。しかし人々は慌てることなくゆっくりと何事もないかの様に生活をしている。北京の空気はゆっくりと流れている。

前門に着く。前門から天安門を望むと、高さ40Mの白亜の人民英雄記念碑が聳立っている。この記念碑にアヘン戦争以後の重要な八つの革命的事件が刻まれている。向かって左に人民大会堂、右に歴史博物館、革命博物館。そしてこの巨大な建物に囲まれただだっぴろい広場が天安門前広場である。広場には正方形の石が敷きつめられ、式典が行なわれる時にはこの石一つに人が一人立つようにできている。

1949年この天安門上で、毛沢東主席は中華人民共和国の成立を中国全土に、全世界に向かって宣言した。文化大革命の時も4人組追放の時も世界の人々は注目し続けた。北京が中国の顔であるなら、天安門前広場は中国の舞台である。私はその舞台の小さな敷石の一つに立っている。

夏の日差しを浴びながら全国各地、あるいは海外から来た観光客が人民大会

堂の回りを取り囲み、あるいは天安門の中に吸い込まれていく。

堀に掛った五つの橋のうち、真中の橋を渡ると天安門である。正面に大きな毛沢東の写真。右には「世界人民大団結万才」左に「中華人民共和国万才」の文字。多くの観光客、そしてけたたましい騒音。さすが北京、いや中国の中心である。

天安門は紫禁城の正門である。紫禁城は明の永楽帝が14年の歳月を費して造営し、清朝がこれを継承した伝統的宮闕制度を示す唯一の貴重な遺構である。この紫禁城をそのまま博物館にしたものが故宮博物院である。

とにかく広い。東西約７００Ｍ、南北約１Ｋに及ぶ。あの天安門も紫禁城の一つの門にすぎない。紫禁城の中心に位置し、その正殿である太和殿に着くまでいくつの門を越えてきただろう。天安門、端門、そして世界最大の城門の午門を通って城の内に入る。門を一つ過ぎるごとに展開する新しい場面に感激を覚え、太和門を越えてようやく辿り着いたのである。

太和殿は紫禁城中最大の建築物であり、ここで皇帝の公式な儀礼が行なわれた。正面の階段の中央には竜を刻んだ大きな石の斜面がある。これは皇帝が鳳輦にのり通る道である。

太和殿と同じ白大理石づくりの三重基壇の上に建つ中和殿・保和殿が続く。ついで乾清門に入る。ここからは内廷である。皇帝の正宮である乾清宮・交泰殿、そして皇后の正宮である坤寧宮と続き北の正門である神武門でやっと終わるのである。これらの建物が一面の敷石の上に黄色の瑠璃瓦を光らせ白大理石の壇上に一直線上に建ち並んでいるのである。なんとも壮厳である。圧倒させられてしまった。

それぞれの宮殿にはさまざまな物が陳列されている。絵画館、珍宝館といった所も見学したのだが、説明は中国語で書かれていてわからないし、急ぎ足での見学ということもあってじっくり見て回ることができなかった。非常に残念である。自分の不勉強さを悔やみながら故宮博物院を出る。

バスに向かって歩いている間もまだ紫禁城の壮大さの興奮が覚めやらない。あわただしい見学であったのに全部をざっと見るのに午前中いっぱいかかってしまうのである。

たった一人の皇帝、そしてそれを取り巻く百官、壮厳な儀式、何千人という

宮女、そこでくりひろげられる華やかな宮廷生活、その裏に潜む陰謀、絶大な権力とその下で苦しむ民衆。紫禁城とダブって私の脳裏を次々と掠めてゆく。歴史の大きな流れは北京の空気の様にゆっくりと流れていくのだろうか。

北京友誼商店

心理学科3年　津賀　保宏

中国での買い物は、一寸変わっていて、限られた場所で、その回数は少なかったのだが、ここで少し中国での買い物（特に「北京友誼商店」）について書いてみたいと思う。

私達が中国で使うお金は、中国人が使うお金とは違い「外汇兌換券」という、外国人専用の紙幣で、表は中国語で印刷してあり、裏は英語になっていた。見た目では、一寸お金というより日本の商品券といった感じがするが、これは中国銀行から発行されているれっきとしたお金なのである。相場は一元が、160円弱であった。この紙幣は、何処でも使えるものでな　限られた外国人用の店でしか使えないので、一寸街角でたばこやらを買うわけには行かないのである。

日本円を中国元に換えたのは、北京滞在2・3日目位だった。換えた場所は、外国人専用デパートの北京友誼商店の中の一角で、いわゆる銀行みたいな感じで、簡単な書類を書いて手渡すと、すぐに換えてくれた。

カウンターの中の人は、いかにも目付きが鋭く、頭の切れそうな、刈り上げのよく似合う男の人数人と、普通日本の銀行員の女といったら、年がら年中肩こりと腰痛もちの冷え症に悩んでる、かよわそうな厚化粧な女を思い浮かべるが（私の偏見です。）あちらの女性といったら、まさに質実剛健というか、飾りを捨てたというか、いかにも職業婦人といった感じの地味な女性が一人いた。

そのカウンターには、無論日本人だけでなく、各国の人々が取り回いていた。つまり、世界中といってはおおげさだが、まあそれくらいの人達相手の仕事なので、相当なエリート達であったと思う。

さてその「友誼商店」とは、どの様な意味かというと、「友誼」の意味は、「友情」とか、「親友のよしみ」などの意味があり、英語では「Friendship」の事である。これはおそらく、外国人に対して買い物を制限する印象を与える外国人専用店に、友情であるとか友達のための店みたいな響きをもたせる、中国らしい配慮のうかゞえる名のつけ方だと思った。

こゝは、日本の商店とは違い、百貨店といった感じで、建物の規模は、ダイエーとかイトーヨーカ堂位の大きさを思いうかべてもらえば良い。しかし、インテリアや建物自体は擬ったものでなく、衣類売場にはマネキン人形の姿もなく、どの売場も陳列ケースが並んでいるだけの処だった。

建物は4・5階建てだが、売り場は一階から三階までだった。各階の商品は全てみてまわってないのでよくわからないが、一階には、食料品（お菓子が多い）たばこ、酒類、薬などが売っていて、二階は、衣料品や、手芸品などが主で、三階は、置き物や記念品、アクセサリーなどが売っていた。又、外国の化粧品や、冷蔵庫などの電化製品とか、自転車など、長期にわたって滞在する人用と思われる物も売っていた。

さて、我々一行が、どの様なものを買ったかというと、だいたい皆して買った物は、酒とかお茶とかいった物だった。私が見た限りでは、この訪中団の中にも世代の差というかズレがあった。

若い世代（無論私を含めて）は、カシミヤのセーターとかマフラーとか、見てくれのためのものに特に人気が集中し、高校生の間では、人民服やその帽子なども人気があった様だ。

それに対し、上の世代は、置き物、飾り物とか扇子であるとか、いわゆる記念品というか、老後の楽しみの想い出の品々を買い求めていた様だった。

ここは日本語が少しと、英語が少し通じるのでさほど苦はなかったが、時折わからなくなって、英語と日本語のすごいチャンポン語で話し、なにやらだんだん言っている本人も、わからなくなり、はたからそれを聞いていると尚更わからないので大変おかしかった。

あちらの店員さんは、愛想は全くないのだが、非常に丁寧で責任感にあふれる感じだった。めんどうくさそうな仕事も、買い手の身になってくれ、見てるだけでも、その商品を出してくれ、それが気に入らないと、色々と次から次へ

黙っていても出してくれた。品質が良い物という自信がなければ、あぁはいかないだろうという感じであった。

中国の人は、仕事に融通がきかないといわれる向きもあるが、それは自分のパートを各自が責任を持っているというあらわれではないだろうか。某デパートでバイト中に、客とけんかして始末書を書かされた私とは、えらい差である。要するに売ってる物が肝心なんだ、店員の愛想とか店内の華やかさは、その商品とは何の関係もないという言が、私が中国で買ったお気に入りのセーターが物語ってくれているのである。

北　京　体　育　学　院

経済学科３年　後藤　敏夫

私達学習院大学陸上ホッケー部は、中華人民共和国へ８月３日～８月１１日まで行きまして、最初、北京体育学院の外国人留学生寮に泊まりました。

この北京体育学院は中国全土で13ある体育学院で一番設備がよく生徒も優秀な人がいるとのことです。

この北京体育学院の私の印象は、やはり中国らしく広大な敷地だと思いました。北京空港からバスで留学生寮へ向かいましたが、北京体育学院と書かれた門を通りぬけても、私達が泊まる寮まではバスで３～４分ぐらいかかり、かなりの距離がありました。

この途中に毛沢東主席の高さ10メートルぐらいの大きな銅像があり目につきました。

また、寮から試合をするグランドへも歩いて15分、走って５～６分ほどの距離があり、途中バレーボールやバスケットボールのコートが何面もあり、またたくさんの体育館や武道館がありました。

その途中の掲示板に、「中日友好曲棍球友誼試合日本学習院大学」というポスターがはってあり皆んなで喜んで見ていました。

次に寮の建物はどうだったかというと、洗濯物が窓にたくさん干してあったり、売店や小さな銀行もあり、又西洋人や日本人や華僑の団体や他のアジアの

国の団体が泊まっているのもみましたのでホテルといった方がいいのかもしれません。

私達の泊まった部屋は木製のベット、机、そしてちょっと大きめな上海製の扇風機がありました。

飲物は、部屋に大きなマホービンがあり、それでお茶や紅茶を飲みました。次に食事はどうだったかといいますと、想像していたものよりもずっといいものが出てきまして本場の中国料理を食べられて満足でした。

しかし、やはり毎日中華料理ばかり食べていると、すしや天ぷらやうなぎが食べたくなりました。

今度は、北京体育学院の副院長先生に学院のことを説明されたことで覚えていることを書きますと、学生と同じように先生方も同敷地内に住んでいるということと、百メートルもあるプールがあるということです。

日本では大体の学校は25メートル位の大きさなので百メートルのプールは想像できませんでした。

最後に北京体育学院の中を案内されていろいろな競技の練習場を見学させてもらい特に印象に強かったことを書きますと、体操と陸上競技の練習風景です。

日本の小学校の低学年かそれより小さいかもしれない子供達が一生懸命練習しているのを見ました。

段違い平行棒で足が棒から棒へかろうじてとどく小さな女の子を見たとき、かわいそうな気もしました。

これらを見て私は、子供達が熱心に練習をしているので中国の運動が急激に世界のトップクラスに躍り出たのは当然だと思いました。

同時に、これからはますます強くなるだろうと思いました。

万　里　の　長　城

法学科4年　安養寺　透

山道である。私達を乗せたバスは、のろのろと登っていく。日本のどこでも見られるような山々が視界に拡がる。だが、その山々の上方に霞のように雲が

かかっている様は、水墨画をも思わせる。やがて、その霞の切れ間から黒っぽい壁が姿を現わす。

それは、まさしく長い、とてつもなく長い“壁”であった。山の陵線に沿い右と左を分かつかのように、そびえる“壁”だった。

私は幼い頃、国と国との境には、壁がずぅーと作られていると思いこんでいたものだが、これがその私が考えていた“国境”だった。

“彼”は国境を作ったのだろう。“彼”が治める国を何人にも侵されない為に、永遠に“彼”の国が守られるように。そこで、彼は多くの労働力、エネルギーを提供する事を強要したのである。彼らはどんな気持ちで働いていたのだろう。自分の国を守るためだ、と愛国心に満ちあふれていたのだろうか。それとも、それを強いる“彼”に対して憎悪の念を抱いていたのだろうか。

ともかく、国境は于余曲折を経て完成し（いや、それはまだ未完成なのかもしれない）、はるか昔初代の“彼”の恩惑は達成された。そして現在、「月から見える唯一の建造物」と言われるこの“国境”を“彼”は月の上から得意気に眺めているのかもしれない。

だが、月から見えようと、太陽から見えようと、“彼”にはそれを作った大勢の、それこそ数え切れないほど多くの、ちまたの人々の労苦（一言で片付けてしまうには余りに申しわけない）は、見えないに違いない。それどころか、月の上で新たなる国境を作っているに違いない。

観光客用の入口から、壁は左右に分かれ、私達は急傾斜の左側を選ぶ。山道が交通渋滞し、その入口まで徒歩で10分ほど登ってきたが、さらに比べものにならない程の急斜面に築かれた壁を登っていく。かっての兵士達は、この斜面を重い装備を着けて登り降りしたのだろうか。これもまた過酷な労働である。

急坂を登りつめた所に、望楼の様な物があり、たくさんの人達があがり四方を見渡している。外国の人もいるが、大半は、家族連れや、アベック、解放軍兵士、等の中国の人々がそこにあがる。下方を見下すと、短い距離でかなりの高度を登ってきた事がわかり、壁は霞に消えていくまで延び続け、そこを人々が、まるで働き者の蟻の様にひっきりなしに行きかっている。皆は、そこにあがった、その時“彼”に変身し悦に入り、そして、そこを降りると再び、日常の“ちまたの人々”に返っていくように思われた。“彼”に変身する事で、初

めて自分自身のちっぽけな姿を見つめる事ができ“彼„に対する自分を意識するのではないだろうか。

その望楼を降り、なおしばらく行くと、胸壁は粉々に砕け、ガレキの山と化し、それが100メートル程続いている。こゝまで来た人々も、それを見ると振り返り、今来た道を帰っていく。また、その崩れた壁の土に腰かけ、休息をとる人もいる。

彼らはこの様をどう見るのだろうか。“彼„の挫折か、それとも“ちまたの人々„の小さな抵抗か。

そして望楼から見えた大勢の人々、ここに腰かけパンをほおばる人、一人の例外もなく、彼らはいつでも私達をじっと見つめてきた。その瞳は、この地に何を求め、何を感じたのだろうか。私は、その瞳の奥に、きらめくものを感じ、その瞳に大きな期待をもってこの地を後にする。

顧みて、私はこれまで日本において、数々の「名所」と呼ばれる地を訪れた。皇居、日光の東照宮、奈良の東大寺、等々。しかし、ここで得た思いは、どの地でも抱いたことはなかった。それが、大陸にやってきたためか、また万里の長城が、余りに大きかったからか、はわからない。ただ言える事は、再び日本の「名所」を訪れる時に、私は日本の“彼„をそこに見るだろうし、自分も含めた日本の“ちまたの人々„を感じとるだろう、という事である。

遙かなる大地への想い

経営学科4年　高井　通昌

8月7日午前5時30分、夜が明けて間もなく、我々は北京首都空港へと向かった。

北京の朝は早い。労働者達が自転車に乗り、バスを満員にして往来する。その人の多さには思わず溜息をつく。

いよいよ内蒙古へ出発だ。滑走路の東端から昇る眩しい太陽を体の真正面で受け止めた私は、中国民航のプロペラ機に乗り、期待と不安とが交錯し高鳴る鼓動を抑え、一路内蒙古自治区の首府呼和浩特市へと向かった。

五台山脈の上空を通過して行く飛行機の窓から見下ろした大陸には、樹の緑が殆んど見当たらない。大地が太陽光線を反射するだけである。これが自然なのだろうかと改めて感じざるを得なかった。

内蒙古へ近づいて来たのが分かった。耕地が鮮かに規則正しく区画されている。そして時折、家屋が何軒或いは何十軒かで一つの集落を形成している。人民公社かその下級単位の生産大隊であろう。

しかし何と言えば良いのだろうか……。私は中国大陸の広大さには、ただ感嘆するばかりであった。朝早く起きてまだ眠いはずなのに、そんな大自然を約1時間半見つづけて眠気が醒め、いつの間にか呼和浩特空港に降り立っていた。

滑走路は草原の中に一本あるだけで、ターミナルビルと呼ぶにはおよそ程遠い小さな建物の方に向かって歩いて行った。ここでは撮影禁止と聞かされて、周囲を見渡したら背後に戦闘機が数機並んでいた。モンゴルとの国境を近くにもつ内蒙古自治区では当然の事と思われるが、平和な国ニッポンで戦争を知らずに育ってきた私は、納得のまえに畏れを感じた。そんな不安を抱きながら、出迎えの方々と挨拶を交しバスに乗った。

空港から市街に近づくにつれ、自転車に乗った人々、ロバや馬に荷車を引かせてその上に乗っている人々が、怪訝そうな眼で我々を振り返る。乗っているバスが外国人専用で、この地を訪れる外国人珍しさ故に向けられる眼かも知れない。

内蒙古自治区は中国の北部に位置し、面積は45万平方キロメートル。人口は1千万人弱。うち漢民族が95%を占め、モンゴル民族、その他少数民族が5%という。首府呼和浩特市はモンゴル語で「青い都」の意味を持ち、人口約110万人（市街地では約40万人である。平均海抜1,100メートル、郊外は中国有数の草原地帯である。羊毛を原料とした毛織物工業が盛んで、皮製品、乳製品、製糖などの工業も行なわれている。農産物は小麦中心に馬鈴薯、てんさいなどを生産している。

我々の宿舎は市の中心部にあり、「呼和浩特賓館」という市で唯一の外国人専用のホテルであった。絨毯が敷かれた階段を昇り、多彩な設備が整えられてある部屋に案内された時、最大級の歓待を受けていることを感じた。

夜、宿舎に於いて歓迎レセプションを催して頂いた。政府関係の方々、体育

協会関係の方々、選抜チームの選手諸君等と共に、羊の丸焼に舌鼓を打ち、茅台酒で乾杯し、片言の中国語と身振り手振りで心を通わせ、歌ったり踊ったりして、最高に素晴らしい一夜を過ごした。内蒙古の人々の純朴さは我々の心を和ませてくれた。そして何よりも心を打たれたのは歓迎レセプションが終わった後であった。

内蒙古の方々が初めての国で数日過ごした我々の体の具合を心配し、医師を呼んで下さったのである。丁度、怪我人、病人を数名抱えていた時であり、その心遣いには誠に頭が下がる思いであった。女医の先生が宿舎で一応一通り診察し、中でも比較的重かった者は、夜遅いにもかかわらず病院で鍼治療、電気治療を施し、漢方薬まで処方して頂いた。我々はただ「謝謝！」とだけしか言えなかったが、異国の地を初めて訪れ、何かと不安が多かった私は、内蒙古の人は親切であると聞いてはいたが、これほど人の親切を身にしみて感じたことはなかった。正に大和民族と漢民族とが心を一つに通じ合わせたのであった。

翌日試合は市の中心部から少し離れた静かな森の一角にある、数万人を収容できる競技場の正面及びバックスタンドを満員で埋めつくし、２万人の観衆が見届け、雨上がりの全く涼しい気候の中で行なわれた。

結果として敗れたが、試合後グランドを一周した我々に、大観衆が一斉に拍手してくれたあの感動は、一生忘れ難い思い出となるだろう。日中友好親善の為にこの地を訪れた事を改めて誇りに思った。

３日間だけの短かい内蒙古での滞在であり、少女の曲乗りに唖然とした騎馬ショー、塚から果てしなくつづく麦畑の彼方に、呼和浩特の街並みがかすんで見えた王昭君の墓、ラマ教の寺院として名高い五塔寺など皆印象深いものがあったが、私はかってこれほど心温まる歓待を受けたことはなかった。10年、20年、30年過ぎても、私の心に刻まれている永い一生の思い出となるだろう。

空港で政府関係の方々、選抜チームの諸君等と一人一人握手をして別れを惜しんだが、彼らといつか再び会える事を私は願っている。

最後に、この訪中に多大なお力添えを賜わった、衆議院議員である二階堂進先生はじめ、北京体育学院、内蒙古政府、在日中華人民共和国大使館の方々、通訳の于再清さん、範玉明さん、ＯＢ諸先輩方に深くお礼申し上げます。

文化のにおい

経済学科2年　増田　卓郎

8月10日最後の夜。薄暗いオレンジの光が点る長安街を、我々は急ぎ足で民族文化宮へ向かった。中国歌劇舞劇院演出、歌舞を見るためである。広い会場は観客でいっぱいである。素晴しくよく通る声で発音の美しい中国の女声独唱に聴衆は聞きほれた。鮮やかで、きらびやかな衣装を身にまとっての舞劇に魅せられた。あの信じられないような速さの木琴独奏に観客からどよめきの声、喰い入るまなざし、惜しみない拍手がおくられた。日本民謡ソーラン節が歌われ、我々を喜ばせた。他に、ジングルベルやドレミの歌も歌われ、不思議な感じを受けたが、時間を忘れて楽しんだ。

8月11日、雨の北京である。北京市街を北西へ抜け、10分ばかりで北京動物園へ着いた。北京動物園といえばパンダである。他の動物は日本でも見られるがパンダはそうもいかない。もっとも動物園へ行けばの話だが。

門を入るとすぐにパンダがいた。月曜日であり、雨も降っていたためかかなりすいていた。まず、一頭のパンダがタワーに登って遊んでいた。見ているのは外国人ばかり。（我々も外国人になるわけだが）さかんにシャッターを切っていた。パンダを見るのは初めての人が多かった。私もその一人だが。ここでは6頭程見かけることができたが8頭もいるそうである。中国ではパンダは大熊猫と呼ばれ、ここのパンダは場慣れしているというか、さかんにポーズをとり、演技力満点であった。

最後の見学地、頤和園へと向かった。勉強不足の為、頤和園とはどんなものだかわからなかったが、後に、ここは歴代皇帝の別荘地であり、昆明湖の土を堀って万寿山を造ったとわかった。東の門をくぐると目の前に湖がひらけてきた。そして、湖沿いに蜿々と続く長廊には、その梁、天井に牡丹や西遊記や風景が描かれついた。その長廊の先に排雲殿があり、さらにそこを抜け、石段を登ると、よく写真などで見かけた仏香閣についた。そこからの眺めは素晴らしく湖やそこにかかる橋を一望することができた。

中国は広く、人も多く、人種も多くて、“中国では„と言うことは安易に言えないと思った。また、日本とは隣の国、文化の源、母の国であり、全て中国の影響を受けてきたにもかかわらず、この国についてなにも知らないと思った。

心情への訪問

経営学科4年　盛　正樹

皆が、共に中国にやってきて良かったと思った瞬間はいつだったろうか。どの場面も素晴らしく、それぞれに感銘を与える。

偉大な歴史の足跡をこの目で見ることも、大観衆の前での国際試合も、内蒙古の選手達との束の間の友情も、どれも多様な色調を添えて、感じやすい僕等の心に貫流してくる。

２人の通訳の人がいた。僕等の目と足があぶなっかしく摑まえたものに歩調を合わせて、中国を紹介してくれた人だ。于さんと範さんという。見るもの、聞くもの何でもめずらしがる騒々しい僕等、これを乗せてくれたパイロットが中華全国体育総会のベテラン通訳の于さんと、パーサーが北京外国語学院の範さんである。

この２人は対照的だ。于さんはスポーツシャツにスニーカー、逆に、範さんは短かい頭髪に簡素な服、黒ぶちのめがねという典型的な中国の青年である。さすがにパイロットの于さん、機内放送の日本語も流暢で日本についても詳しい。パーサーの範さんは24歳と于さんよりも５つ若く、日本語を学んで３年足らずだが、概ねのこちらのいいたいことはわかってくれる。話しっぷりはたどたどしいが、かえってそれが親しみを感じさせ、誠実味のあるとっつきやすさと合わせて一躍、僕等の人気者となった。

「彼ら２人のおかげで」ザックザックと感動の宝物を手に入れることができた。まず範さんの表情を伝えよう。はにかみ屋である。これが日本人のそれとなんら変わらない。驚いたもんだ。中国に来てまずこれに出会えるとは、ついでに照れ笑いまで日本人だ。わけもなく嬉しくなってきた。

僕等の人なつこさと彼の純朴さが非常にウマが合った。いやいや、僕等の賑やかさが彼を巻き込んだに違いない。彼は本場の日本語に触れるのは初めてだ。そんなわけで珍妙なシーンが続出する。中国にやってきて３日目のことだ。故宮博物院に向かうバスの中でのやりとりだ。

「日本では私立と国立の大学とでは、どちらが優秀なのですか？」と彼が尋ねる。

「一長一短です」と吉岡がいう。

「……？何ですか、それは？」

「一長一短というのは、えーと」どういう風に説明したらよいのやら。

「良い所もあるし悪い所もある、どっちつかずというところです」すると、

「どっちつかず？どういうことですか？」とくる。

「一概にどちらが良いとはいえない、ということです」これまた首をかしげる。一概がわからないらしい。

「簡易に判断することはできない、という意味です」

「あーあ、わかりました。」と、笑いながら相槌を打つ。範さんがほんとにわかった時は、曇った怪訝な顔つきから一転して白い歯が見えた時だ。我ら学習院こそ自由闊達な人種だという自負が、その中にあっても学習院こそが最高だということを無理やり納得させてしまった。

彼はどうもカタカナと四文字の熟語に弱いらしい。それと、ペースを上げて僕らが話し出すと途端にキョトンとしてしまう。

「みなさん、早口でわからないです」と。わからないの「ない」の部分だけ妙にアクセントがついている。

一方、世界とスポーツ交流をしていこうという中華全国体育総会の一員として、僕等の世話をしてくれた于さんであるが、中国の人と話しているという気が起きない。暇になると岩波文庫の小説を読んでいた。

急拠、最終日に北京動物園に行けることになった。やんちゃな小学生を引率する先生のように、園内を案内してくれたのが印象に残っている。北京動物園の目玉商品はパンダである。それ以外に何が見たいかと于さんが尋ねた。僕等はライオンやしま馬や象が見たいといった。いや、ほんとうに見たかった。北京でライオンを。于さんはライオンはずっと遠くになるから、カバで我慢してくれと真剣にいった。これがおかしかった。僕等も真剣だが、彼も真剣だ。ライオンの替わりにカバを見る事が。わかって下さいますか……。

北京動物園から頤和園へ向かった。ここで中国にて最後の食事をした。お世話になった中国の人達ともこれでお別れなので、乾杯が何度も続く。次第に皆の口に合ってきた北京のビールが次から次へと運ばれてくる。範さんはどうやらお腹の具合いが悪いらしい。幾度と重なる乾杯がこたえたらしく、お腹を手

で押さえている。

これで中国を後にするが、多くの出来事が吟味する間もなく過ぎていく。一度きりの激しい、多彩な経験を感じまくってやるんだという意気込みも、感傷的な気分が混じってくると、心のチャンネルを変える必要があるようだ。

帰り際、範さんは苦しそうな顔をして足元をふらつかせている。

「範さん、お腹はだいじょうぶですか」と、彼に声をかけると手を握り返し、

「ええ、だいじょうぶです」と、この時今までには見られなかった笑顔を見た。

心情と心情が触れ合うというのはこういう時かもしれない。この場面、とても印象に残っている。妙に印象的だった。

ある出来事を記憶で生き返らせることは、その時の映像と心情を再現することだ。この時ばかりはこれがなんとも溶け合っている。いつ再現してもこの部分は鮮明だ。

中国人の心情というスロットマシーンに、ピッタリと銀貨を当てはめることはやさしくない。西欧の人々は硬い大判の銀貨を無理やり突っ込もうとする。日本人がスロットマシーンに入れれば、多少サイズが合わなくとも、ストンと落ちていく気がする。こんな風に思ったのはその時だ。

名所を訪ねることも素晴らしかった。親善試合も素晴らしかった。僕等と同世代の青年達が、ホッケーをやっていることでさえが驚きなのに、ビックリした。うれしかった。熱くなった。晴れやかでもあった。

中国にはトルストイもビートルズも知らない青年がいっぱいいる。中国の実物の人間を知れた喜びは自分でしか見つけられない、自分自身で発見したものだ。感動づくめの中国遠征。そうだ、感動ラッシュのピークはここにあったのかもしれない。

うたげの中の片想い

経営学科3年　高橋　直

「乾杯!!」「カンペイ!!」……あの独特な香りの茅台酒が、喉を通り過ぎた

時の刺激は今だに忘れられない。

中国への親善訪問と云えば必ず思い起こされるのが「歓迎宴」であろう。幸運な事に二度も歓迎宴を開いていただいた。

一度目は北京に着いて二日目。まだ中国にも慣れていなく、緊張も抜けきらない時分であった。陳先中華全国体育総会副会長主催のその会は、天安門付近の「北京烤鴨店」で行われた。北京烤鴨（ダック）と云えば中華料理の中でも最高で、それも本場で味わえたのは大変幸運、且つ貴重な体験であった。

北京烤鴨店の外観はごく普通のビルで、中に入っても赤い豪華なジュウタンの敷いてある廊下に幾つかの扉が並んでいるだけで、およそ日本では見かけない造りで、そこには中国らしい香りが漂っていた。通された部屋には四つの円卓があり、すでに料理が並べられていた。隣接の応接室で双方の役員の挨拶が済むまでの間、茅台酒の強烈な匂いが私の不安と緊張を一層強くしていた。

出席者は、陳先氏、中国ホッケー協会会長、副秘書長はじめ北京体育学院ホッケー部のコーチ、選手、世話役など10名程で、それぞれ分散してテーブルに着いた。

そして宴の始まりとなるが、日本の様に最初に乾杯はなく、主催者が席に着くと自然に始められ、宴が少し活気づき雰囲気も和らいだところで、双方の挨拶が行われ乾杯となる。乾杯は一人一人の挨拶が終るごとに行われ、その後その人が他のテーブルを乾杯して回るので、自然と乾杯の回数も多くなる。この方が宴も盛り上がり、多くの人々との触れ合いが生まれる。そこに国民性、習慣の違いを感じ又、中国人の賢さをみた思いがする。

最初の乾杯で茅台酒のあまりの強さ（酒精度55°）に驚き、恐しくなりジュースばかり飲んでいた私だったが、一通りの挨拶と乾杯の嵐が過ぎ、記念品の交換が終った頃にはやっと落ち着いてきた。そして料理の味もわかる様になり、又片言の中国語と英語でまわりの人々と話す事も出来た。料理は私の口にも合い、大変美味しいものでさすがに本場ものは違う〆と思った。特に北京ダック（アヒルの丸焼き）は、日本では滅多に味わう事の出来ない料理で絶品であった。が、勝手がわからずに次から次へと欲を出して食べた為、最後の方に出されたメイン料理（烤鴨子）を、あまり食べる事が出来なかった事は大変な失敗であったと、後悔している。

17～8種の料理の後、果物とアンニン豆腐で締めくくられたが、中国の中華料理を満喫出来た事は一生の想い出となり、その味は私の舌を離れないであろう。料理は風土から生まれる ― と云われるが、材料の持ち味を最大限に生かし、私達を新しい料理の世界へ引き入れてくれた中華料理には、万里の長城などと同様に、中国の底知れぬ魅力が秘められている様な気がする。

なごやかな雰囲気のうちに宴は終り、協会の人々と握手を交しながら「謝謝、再見〻」と言っている自分に気付き、少しは中国に入り込めたかな？などと思いながら、北京烤鴨店を後にした。

二度目の歓迎宴は内蒙古で行われた。呼和浩特市に着いた日の夜、金海如内蒙古自治区人民政府秘書長の主催で開かれた。会場は宿舎の呼和浩特賓館の食堂である。例によって双方の役員同士の挨拶が終るのを待っていたが、皆すっかり中国にも慣れた様子で、余裕の表情で前回飲めなかった分を取り戻すべく張り切っていた。（明日は試合だというのに。）

出席者は、金海如秋秘書長、内蒙古体育総会会長、内蒙古代表チームの監督、選手など10名程であった。

勝手がわかってきたので宴は自然な雰囲気のうちに始まり、酒も自発的に飲む様になり、生き生きとした態度で臨んでいた。

こちらの人々も酒が好きらしく、さすがの私達も少々参り気味であった。酒は青城麯酒といって、酒精度60°というアルコールと大差ないもので、とても味わいながら飲むなどという事の出来ない曲者であった。しかしこれは、厳寒の長い冬を乗り切る為に必要な事であるという。

挨拶や記念品の交換が終る頃になると、騒々しい位に盛り上がり、実に和気藹々とした宴になった。これは現地の人々の非常に社交性豊かな性格と、親しさあふれる笑顔に負うところが大きく、そんな彼等の心が、ひしひしと伝わってくるのを感じた。私は飲みかけのコーラにビールをつがれ、妙な味のものを飲まされたが、それも今では忘れられない味となっている。

やがて席を離れ、名前を教え合ったり、持ち物を交換したりして色々な人と乾杯を重るに至り、私達の気分は最高潮に達した。そして歌合戦が始まり、こちらは歌謡曲から飯坂団長の荒城の月まで、あちらは中国民謡から騎馬民族の踊りまで出て、まさに言語や風習の違いを超えた交流が行われた。存分に食べ、

大声で笑い、そして歌い……乾杯の連続。理屈抜きで楽しく、海外遠征をしているという実感とうれしさが心底からこみ上げてきた時であった。料理も地方色豊かで、特に小羊の丸焼きは、遊牧民族を思わせるダイナミックな味であった。

宴は、皆の心が一つとなり、打ち解けた雰囲気のうちに終り、明日の試合の健闘を互いに誓いながら、固い握手を交し別れた。

一度目は厳粛な中で、最高の中華料理を賞味し、二度目は非常にくだけた雰囲気の中で存分に酒を楽しむ事が出来、それぞれ大変印象深い。両方共素晴しい思い出である。同時に中国人に触れ、彼等を知る絶好の場でもあった。彼等の私達に対する態度には、常に友好・親善を深めようとする精神が徹底しており、宴の運び方も上手で、言葉のハンデを感じさせない点も感心させられた。又、酒好きの人が多かったが、どんなに飲んでも一線を崩さず、毅然とした態度を持ち合わせていた点も印象深い。内気で口下手で、孤立しがちな面を酒でごまかそうとする日本人にとって、見習うべき点が多いと思った。

彼等と一諸に中華料理を食べ、酒を飲んでいると、「腹一杯食べて、酒を飲む事が最大の仕合せである。」という中国人の心中がわかる様な気がした。

本当に素晴しい遠征であった。この様な歓迎宴や試合、見学などを通して私達に多くの事を教えてくれた中国の人々。そして中国という国。

中国 —— この言葉には欧米の国々とは異質の響きを覚える。日本の母なる国だからなのだろうか。

中国には日本や欧米などが真似出来ない大切な「何か」が潜んでいる気がする。産業や経済の面では確かに私達の方が進んでいるかもしれないが、私達がいくら努力しても手に入れる事の出来ないものがある。—— 素晴しい大自然とその中で育まれ、いきづいている豊かで純粋な心。そして十億という大民族なるが故の誇りと、それを感じさせない謙虚な態度 —— それ等に私達は到底対抗できない。

質素さの中に生気溢れる街—北京。蒼い空と限りない大地の息づかいが聞こえる地—内蒙古。そして純朴で屈託のない笑顔。私達が失ないかけているものが、中国にはある。

日本が十年でやる事を、中国はその何倍もかけてやる。が、成し遂げた後の

それは、巨大な力となり永遠の輝きを保つのである。そこに偉大な面、秘められた魅力があり、それが、私に一種独特の想いを抱かせるのであろう。

夜の天安門広場で車座になって話をしている人々を多く見かけたが、彼等は一体何を話し合っていたのだろうか。

中国は果てしなく広く、そして深い。

そんな中国と再び会える日が来る事を祈りながら飛行機に乗り、心の中で中国に乾杯をした。———「中国に乾杯!!」

追記

『安養寺プッシュ。球が走る。盛ストップ。止まった球を見つめる。ほんの一瞬であっただろうが、私には長く感じられた。心の中で「一点!!」と叫びながら、思い切りスティックを振り抜いた。次の瞬間、球は地を這いゴールの中に消えた。そして湧き上がる大歓声と嵐の様な拍手。』

二万人の大観衆の眼に映った一点であった。「やったァー!!」、「うれしい!!」私の人生の中で体験した事のない「熱い想い」が込み上げてきた。体中に感動が走った。そしてその「想い」はこれからの人生において心強い味方となり、私を支え続けてくれるであろう。

沢山の素晴しい想い出をつくる場を与えてくださった多くの人々、そしてその準備を手伝ってくれた（諸々の事情により同行できなかったが）浜本、濱口、丸茂、青柳、塩澤のマネージャーに心より感謝します。

「本当にありがとうございました。」

緊張の第一戦

法学科2年　青木　慶次

中国に来て、3日目の8月5日、本日はいよいよ第一戦である。おととい、きのうと観光、レセプション等で、あちこち動き回り又、昨日は練習したがあまり疲れてはいない。そして今日も、午前中故宮博物院見物（とても見学というものではなかった。）に行ったが体調もまずまずといった所である。

午後1時に北京体育学院の寮で昼食をとり、各自部屋で少し休んだ。初めて

海外試合をこれからやるという割に、緊張もしない。二時に各自ユニホームに着がえ集合した。学習院チームは白のユニホームに紺パン、そしてストッキングは紺である。

本日の対戦相手は、北京から500㎞も離れた所から、我々と試合をするためにやって来た内蒙古のチームである。話によるとここが中国では最強と聞く。初戦から敗れるかな、という不安がよぎる。

グランドに着くと相手はまだ来ていなかった。このグランドは広い草っ原の一角にあるという感じで、他にまだグランドが三つは充分に作れる位の広さである。又、昨日練習した時とは違い、グランドの周囲には色とりどりの旗が立てられ、又本部席も作られており観客もまばらであった。

グランドの状態は、はっきり言っていいとはいえない。雑草がはえているし、凸凹もかなり多い。中国では土のグランドでもスパイクを使用しているせいだろう。我々がアップをしている内に、内蒙古チームがやって来た。向うのユニフォームは濃緑で、下の極端に短い白の短パンだ。やはりスパイクを履いていた。個人を見ると、我々より年は上のように見え、又、ひげをはやした人が多い。体格もがっしりしている。

4時の試合開始時間近くになり、観客はかなり多くなり、グランド周囲はほとんど人で囲まれてしまった。

両チームは本部席前に整列し、観客はかなり多くなり、グランド周囲はほとんど人で囲まれてしまった。

その後いよいよ試合開始である。学習院の先発メンバーはFWが小林、安養寺、盛、高井、横溝、HBが高橋、外山、青木、FB奥寺、野崎、GK菊地である。

開始早々から我々がおされっぱなしである。内蒙古は強い縦パスを使って攻撃してくる。普段からこういう荒れたグランドを使っているせいかトラップも正確だ。前半は結局、始終押れ放しで我々は得点できず、5点を入れられてしまった。

後半に入ってしばらくすると、相手の動きが幾分悪くなり、津賀さん、安養寺さんが各1点ずつ合計2点得点することができた。しかし我々も2点取られてしまい、試合結果は7対2で学習院の惨敗。非常に残念だ。しかし、2得点

できたことは大きな収獲であろう。

第一戦の学習院の敗因を振り返ってみると、まず試合前のアップ不足、そして中国第一戦ということからの緊張、そして今まで明治のような真平のグランド練習していた我々にとって、北京体育学院のグランドは不利ということだと思う。

第一戦は惨敗であったが、もうこれで緊張からも解放されるだろうし、今後の三戦はのびのびしたプレーができるだろう、そして何としても勝ちたい所である。

今回の訪中は、日中親善とうたってはいるが、私個人としては、やはり試合をし、そして何等かの成績を残す事が目標であり、又、色々と援助してくれた方々へも、それが一番の土産となるであろう。また、普通の観光旅行とはせっかく違う形で中国に訪れたのであるから、今後の試合で是非とも一勝でもしたいものだ。

紅姿舞う第一戦

経営学科3年　吉岡　聡

8月5日午後、いよいよ訪中第一戦、内蒙古チームとの対戦である。4時ブリーオフ、全員2時に北京体育学院寮前に集合してミーティングを行った。

第一戦だからか皆少し興奮気味で、ミーティングも耳に入らぬ様子でソワソワしていた。

私は春のリーグ戦で公式審判として笛を吹いた経験を買われ第一戦のジャッジを行なう光栄な役目をおおせつかい（半分は試合に出られなくて残念という気持もあったが……）赤のユニフォームを着て、ストップウオッチを持ち、笛を2個持って、やはりソワソワと試合開始を待っていた。

第一戦ということで、中国側の審判と、ルールの確認を行なう重大な使命をも持っていたので、うまくコミュニケーションできるか不安にさいなまれていた。

さて、グラウンドに着くと、そこは昨日の殺風景な、どこにでもある様なグ

ランドとは一変して、色とりどりの旗やビーチパラソルが立てられ、ラウドスピーカーが置かれ、音楽が流されている、まるでお祭の様な騒ぎであった。その豹変ぶりに一同驚嘆の声を上げ、緊張がヒシヒシと皆をとり囲むのが良くわかった。

皆がウォーミングアップに入ると私に与えられた重大な使命を遂行すべく、通訳のハンさんを供って中国側の審判の所へと赴いた。これはこうですねというごく簡単な確認であったが、私の恐れていた問題が起ったのである。それはハンさんはブリーとかハイスティック等のホッケーの専門用語がわからないのである。

私が身ぶり手ぶり汗だくで説明するので、心配して蒙古の方が3人ぐらいとんできてくれた。私の囲りには4、5人ぐらいの人垣が出来、理解してくれると皆そろって嬉しそうに、我明白（わかった——私は中国語を履習していたのでそれぐらいの言葉はわかる。）と言ってくれるので、こちらもうれしくなって謝謝を連発すると言った具合で、大変時間はかかったが無事にルール解釈を終えることが出来た。

試合が始まるとその様な楽しい気分はふっとんで、ミスジャッジがあってはいけないと緊張の連続であった。そして笛はなるべく大きく吹こうと思ったのだが、あまりに力を入れて吹いたので、度々笛が口からすっぽけ変な音がするのには困った。

内容であるが、内蒙古チームは、なにしろ20人ぐらいのチームの中で100m11秒台が6人に、13秒台の3人を除いた残り全員が12秒台というだけあって、開始直後からものすごいヒットアンドラッシュ戦法を展開し、本院はペースに乗れないで、散発的に攻めるという具合で一方的に点を取られ、後半は互角に戦ったものの前半の5点の失点は最後までひびいて結局7－2という大差で敗れた。

印象に残ったのは、内蒙古チームは良くチームの特性を生かし単純だが強力なヒットアンドラッシュ戦法が良く浸透していたことと、その強い腕の力で、ヒット・プッシュが強くレバースからのフリックが普通のヒット並みに強いこと（左からレバースのセンタリングがちゃんと逆まで通るのである!!）とテクニシャンが多いということである。

試合後、内蒙古の方に本院の感想を求めたところ、日本チームは（彼らは我

々を学習院大学とは呼んでくれずにあたかも全日本の様にこう呼ぶのである。)グランドに不慣れでストップ・トラップがあまり良くなかった。しかし、あのきれいなパスワークを私たちも学習したいと言ってくれて、大差で勝ったにもかかわらずその謙虚な言葉には感じ入ってしまった。

私たちは先輩が行なった韓国遠征で、いかに海外で勝つことが難かしいことかを十分認識していたつもりだったが、いざ試合を行ってみると、自分たちの持てる力をフルに発揮できなく、あらためて海外で勝つことの難しさを再認識したわけであるが、この試合は皆にとって非常に良い勉強となった。

最後になったが私のジャッジについても、ベストに近い状態で自分も満足した。又、なかなか好評であった。私も審判に最も必要な、自信というものが付いた。非常にためになったと思う。

追記

前述したように２－７で大敗したが、津賀さんと安養寺さんの得点は、仲々素晴しい点であった。きくところによると、学習院チームが外国チームに得点したのは、韓国での山田さんが最初で安養寺さんが２点目、津賀さんが３点目とのことである。

切れた糸は暗を結う（第二戦）

法学科３年　高木　和彦

完敗を喫した昨日の第一戦から一夜明けた今日８月６日。天候は昨日同様に晴れてはいるものの蒸し暑く、汗がじっとりと出てくる。今日の相手は北京体育学院である。

昨日のミーティングで飯坂団長が、とにかく一勝をあげるよう頑張って欲しいと言われ我々も昨日のような、上擦った気持ちではなく、緊張感をもって試合に臨んだ。

午後４時。両軍選手は整列し、記念品の交換、記念撮影を行ない、ブリーオフの笛を聞く。

開始早々６分。ＬＣからＰＣをとられた。この危機を脱した学習院。なんと

か先取点を奪おうと攻勢に出る。

体育学院はパスカットをすると、タテに強く打ち、ＦＷがこれをひっかけて攻める形だが、昨日の内蒙古程の脚力・スピードはない。

学習院は、ＦＷが中盤で執拗に相手を圧迫し、ＤＦ陣もサークル突入前で勝負をかけ、シュートされるのを防ぐ。

20分を過ぎるあたりから、疲労が見えてきた。蒸し暑さと相手の脚攻との戦いとである。敵の攻めは凌ぐのだが、そこから我々のペースのオープン攻撃へつなぐまでにはなかなかいかず、苦しい試合となってきた。

次第に、ＦＷとＤＦの間が、大きくなり、中盤を支配される時間が多くなってきた。

30分頃ＰＣを二本続けて取られた。シュートの球速は速いのだが、コントロールの悪さと、球をとめてからシュートが、やや遅れるので、一番機に押え込まれたり、ゴール枠をはずしたりで、このピンチを防ぐ。

逆に学習院に速攻の中からＰＣのチャンスが訪れる。だがこの好機を逸し前半は両チーム無得点で終わった。

地元の体育学院が試合をするせいか、昨日に増して観客が多い。日本では観客に恵まれてプレーをすることのない我々にとって、なんとも嬉しい事である。

皆、気合いは入っているが疲労の表情は隠せない。

試合再開、相手も、かなり疲れている様だ。条件が同じなのだから、あとは頑張るしかない。

70分間集中力を持続するということは難しい。自分は、前半は緊張の糸を張りつめてきた。だがこれが切れると、恐ろしい事になってしまう。

11分、ＰＣを取られ、ＧＫが一旦防ぐものの、不幸にもゴール前を守るＦＢの足に当たりＰＳとなる。

結局先制点を取られた。さすがにガッカリしてしまう。

逆に勢いに乗った敵は、畳掛けて攻めて来る。３分後、中央からＬＩにドリブルで持ち込まれ右にかわされ、ヒットシュートで２点目を奪われる。

さらに19分、ＰＣのリバウンドをたたき込まれ、３点目。

疲れてしまった。疲労からか選手もなにか覇気が感じられない。

それでもなんとか１点を返そうと、気力をふりしぼって戦う。

30分過ぎ、ＬＣをとっただけで、シュートを打つまでには至らない。

どちらかと言えば、３失点の後も相手のＦＷが、浮いたポジションを取り、そこへぶつけるパスをＤＦが打ち、ひっかけて攻める攻撃に押され気味で、攻めた、というよりよく守ったという印象が強い。

ついに第２戦も、０対３で敗れた。少なくとも前半は、非常に緊迫感のある、内容の濃い試合をしたのだが。――悔しい。

試合終了後、両チーム選手は健闘を称え合ったが、学習院の暗が、目立っていたような気がした。

第三戦（内蒙古にて）

法学科４年　菊地　　誠

バスは街中に停まった。

「表参道」を思い浮かべて頂きたい。車道も、その両側の歩道も大変幅広く、ひたすら真っ直ぐな道が続いている。歩道には並木が続き、その緑の豊かさに日光が遮ぎられ、薄暗い程である。

そこには三階建て位の建物が続いていた。私達は明日の試合の調整の為に、練習をしに来たのだが……。

私達は建物の中へ導びかれた。そして階段を登った。「まさか……。」

会議室風の部屋を通り抜け、午後の緩やかな陽の差し込む出口へ向かった。

その「まさか」だった

薄暗い建物の中から覗いたその外は、閑散とした大球場であった。扉をくぐって、外へ出ると、そこはメインスタンドで、私達は、驚きと感激で、茫然とあたりを見回した。

薄茶色の広々としたクレーのコートがあり、茶色のアンツーカーのトラックがこれを囲んでいた。グランドは、白っぽいコンクリートの壁で囲まれ、その上部は、何万人も収容できそうなスタンドになっていた。

グランドは固く、ボールが弾みやすく、良いコンディションだとは言えなかった。しかし、真白な真新しいホッケーゴールが置かれコートの回りに、真青

な防御ネットが張り巡らされ、四隅に、赤いコーナーフラッグが立てられ、きちんと整備された様は、国際試合の雰囲気を醸し出していた。メインスタンドは、テラスになっていて、その両側に階段があってグランドにつながっていた。

内蒙古の選手達は既に到着して、私達を待っていた。彼らは緑色のユニホームを着てテラスに集まり、ニコニコして私達を見上げていた。私達もテラスに下りて行き、「你好」と言って握手した。

8月8日、午後4時ブリーオフである。あいにくの曇り空であった。青森県とほぼ同じ緯度にあるこの地方は、陽が陰ると肌寒かった。

町には、この日の試合の事を書いたポスターが貼ってあった。また、車体に宣伝の赤い垂幕を付けたバスが出て、入場券を売っていた。

北京から、中国民航のプロペラ機で一時間半の内蒙古自治区「呼和浩特」。私達は中国に来てから、こちらへ来る事を知らされ、何が何だかわからないうちにやって来たのだが、こちら呼和浩特では、豪勢な準備をしていてくれた。

私達は午後3時少し前に球場へ到着した。既に3,000人近い観客が入っていた。場内には音楽が流れ、試合前の興奮を盛り上げた。

私達がグランドに出てウォーミングアップを始めると、「郵便馬車」「カラタチ」「新雪」等の日本の曲が放送された。この時、内蒙古自治区の私達に対する歓迎と、この試合に対する意気込みが強く感じられ、厳かでさえあった。

私はレガードを準備しながら、球場を見回した。この間にも、観客は続々と入り続けた。

メインスタンドのテラスの奥の壁には、天安門広場などにある様な「毛沢東主席」と「華国鋒首相」の大きな肖像画があった。そして、その上に張り出したひさしには、「日本学習院大学ホッケー代表団が我が自治区を訪問、試合するのを熱烈に歓迎致します」と書いた、赤い横断幕が張られていた。ゴールの後方にある通用門にも、たくさんの人が集まっていて、柵の隙間からこちらを覗いていた。

私は第一戦では、初めての外国での試合ということで、雰囲気に呑まれてあがってしまったが、今回は落着いていた。じっくりと観客席を見る事ができた。白い開衿シャツや紺の人民服を着た人が殆どであったが、子供は色柄物の自由な服装をしている者も多かった。うぐいす色の制服の解放軍の兵士が数百人固

まっていて、そこは一層浮き上がって見えた。

ブリーオフまで30分に迫った。私達は、グランドの横に、椅子を並べて作ったベンチに集合した。そして、冷ました麦茶で口を湿らせた。

飛田監督から「勝敗にこだわらず、良い試合をする」由の注意があった。終始私達のお世話をしてくれた範さんは、午前中の小雨混じりの天気が回復して、薄陽が差して来たのを指して、「天もあなた方の味方をしてくれました。頑張って下さい。」と励ましてくれた。

場内アナウンスで、球場中の視線がグランドに集中した。入場行進である。行進曲に合せ、私達は飛田監督を先頭に、左側からサイドラインに沿って入場した。右側からは内蒙古チームが向かって進んで来た。中央でぶつかると、今度はセンターラインに沿ってグランドの中央に向かった。飛田監督と内蒙古チームの監督が手をつないで高く掲げ、私達もそれに続いて、各々隣りの選手と手をつなぎ高く掲げ、アーチを作って行進した。

グランドの中央で全員、横一列に整列した。メインスタンドには、ギッシリ人が入っていた。その他のスタンドにも、万遍無く人が入り、２万人の人が集まったそうである。

私達は正面に、そして反対側に挨拶した。礼をした頭に、背に、圧倒されそうな大拍手がのしかかって来た。興奮と快感であった。

記念品の交換を行った。私はゴールキーパーの王君を摑まえて、記念メダルを渡し、用意した赤いユニフォームを広げて見せ、彼に渡した。彼は、私達の為に用意してくれた水色のユニフォームを同じ様に広げて見せてから、私にくれた。彼は「アリガト」と言い、私は「謝謝」と言い、固く握手した。何度も何度も繰り返しお礼を言い合った。

午後４時、私達は左側、内蒙古チームは右側のコートに散らばった。

ゴールラインの後ろには、４、５人のカメラマンが、地べたに座ってカメラを構えていた。

「ピピーッ。」

遂に、この大球場で、この大観衆の中での試合が開始された。白いジャージ、紺のパンツ、白のストッキングの学習院、緑のジャージ、白のパンツ、赤のストッキングの内蒙古、両チームの選手が入り乱れた。

前半、立ち上がりから、パワーとスピードの内蒙古のペースとなった。3分、ＰＣから内蒙古が先取点をあげた。地元での大観衆の為にあがってしまったらしく、内蒙古は第一線の様な迫力がなかった。それでも終始、内蒙古のペースで試合が進んだが、その後は、学習院もよく踏ん張って、前半が終了した。

スタンドの最上部に置かれた、黒地のスコアボードには、「学習院－０、内蒙古－１」と入れられた。

後半、学習院は、１点を早目に取り返そうと攻撃したが、決定打がなかった。13分、内蒙古が得意のスピード攻撃で２点目を決めた。ドッと喚声が上がり、拍手が続いた。これで波に乗った内蒙古は、その後続け様に、３、４点目をあげた。

それからは、小康状態が続き、学習院も何度か敵陣サークル内まで攻め込める様になって来た。28分、学習院がＰＣを得た。しばらくの間、場内に流れる実況アナウンスも跡絶え、シーンと静まり返った。安養寺、エンドラインからボールをプッシュ。内蒙古の選手が、ゴールの中から飛び出す。盛、ハンドストップ、高橋シュート、ドスンとボードにぶつかる音。（学習院チームが外国チームに入れた４点目）

大喚声が上がった。私達は皆、跳び上がって喜んだ。内蒙古の得点の時と同様に大拍手が起こった。

結局、私達は１対４で完敗した。中国に於て４戦全敗だった。

私達は、中国で勝つ為に、毎日練習し、合宿をして来た。だから、悔しかった。残念だった。情けなかった。私達は、そんな気持ちで、グランドの中央に集まった。しかし、中国の選手達の前では、勝敗などは二の次になってしまった。それは、おそらく彼らの他の全てを消してしまう微笑の為であろう。

「謝謝、謝謝。」と言って、彼らは握手を求めて来た。私達も、彼らの手を握り、肩をたたいて、感謝の意を表わした。

私達は、メインスタンドに向かって整列し、礼をした。勝敗には関係なく、２万の観衆の惜しみない大拍手が起った。そして、反対側のスタンドの前まで、全力で走って行って再び礼をした。さらに強く、温かい拍手が続いた。私達が手を振ると、拍手はさらにもっと強くなった。左側、右側のスタンドとグランドを駆け巡って挨拶し、ベンチに引き上げるまで拍手は続いた。

試合後、私達は国際試合恒例のユニフォームの交換をした。内蒙古の選手の汗で重くなったユニフォームを着て、肩を組み、握手をして健闘を讃え合った。そして学習院、内蒙古両チームの関係者全員が集まって、記念撮影を行った。何人もの中国のカメラマンが、次々にシャッターを切った。スタンド付近では、飯坂団長を中心に、ＯＢの方々が呼和浩特の子供達と一緒に写真を撮っていた。そこで私達の名簿を配ると、黒山の人だかりとなって、大混乱になった。

メインスタンドに集まった、たくさんの観客の見守る間を通って、スターにでもなった気分で、私達はグランドを後にした。しかしまだ続きがあった。

球場の出口には、たくさんの子供が大人が、私達が出て来るのを待っていた。一人と握手すると、我も我もと、あちらこちらから手がのびてきて、握手攻めになった。私達はもみくしゃにされながら、バスに乗り込んだ。私達は、球場が見えなくなるまで、バスの窓から手を振り続けた。

この第三戦が、今回の中国訪問で最も印象的であったことは、誰しも同じであろう。おそらく、生涯忘れることのできないであろうこのすばらしい体験をさせてくれた内蒙古の人々に対し、私は心から感謝する。

私達は、飛行機で約１時間半で北京から呼和浩特に行ったが、内蒙古の選手達は、汽車で16時間、徹夜で呼和浩特に戻った。それでも私達より早くグランドに行って、私達を迎えてくれたのだ。

私達の為に徹夜で作ってくれたユニフォーム、大球場、大観衆、大声援……彼らの持て成しはすばらしかった。そして何よりも忘れ難いのは、彼らの寛容な笑顔であった。

試合に勝つことはできなかったが、私達、若い世代同士の友好を築くという使命は、果すことができたと、私は確信している。

中国の皆さん、本当にありがとう。

最後の闘い（第四戦）

経済学科２年　増田　卓郎

競技場に入るなり我々はびっくりした。

想像していた以上であった。内蒙古というので砂だらけのグラウンドを覚悟していた。さらに、驚いたことに、その競技場には日本では考えられない位多くの観客が来ていた。そして、メインスタンドの壁には毛沢東、華国鋒両氏の大肖像画があり、さらにその上には「日本学習院ホッケー代表団が我が自治区を訪問するのを熱烈に歓迎致します。」と日本語と中国語と蒙古語による大きな横断幕がかかげられているのに驚嘆、感激するとともに、内蒙古の方々の熱烈歓迎ぶりがにじみ出ている様であった。

第三戦が始まった。最後の試合である。我々は今までの練習の成果を出さねばと、必死であった。しかし、結果は1対4と敗れてしまった。

続いてエキシビジョンではあるが第四戦が行なわれた。我々は今まで練習をしながらも、試合に出場できなかったメンバーが主である。一方、内蒙古チームは続けて出場する選手も多かった。内蒙古の選手は疲れを知らないのかと思う程走りまわる。まさかというようなボールでも追いついてしまう。それからレバースのヒットは我々のフォアのヒットに匹敵する程である。ドリブルなどは少々荒々しいが前進しようという気迫が現われているし、パスにしても前へ前へと打ち込んでくる。

これに対し、我々は練習の成果を存分に発揮せねばと心に、鎖を解き放れた野獣のごとく動きまわった。が、しばしば緊張でそれがからまわりしていた感もある。とにかく心を無にして戦った。最初で最後の大舞台は終わった。一矢をも報いることはできなかった。試合後は非常な虚しさでいっぱいであった。その足どりに我々の気持ちが表わされていた。

負けたくやしさ、無念さ…… しかし、我々はそれ以上のもの —— ホッケーのみならずスポーツをやる者にとってこれ以上の感激はない —— を味わえたと思う。我々は幸せものである。そして、これらの成果を今後のホッケー生活に生かすべく精進努力していく覚悟である。

最後に、この様な試合を組んでいただいた内蒙古体育総会及び代表チームの皆さん、そして飛田監督に心より感謝します。

高等科初の国際試合

高等科３年　一柳　直宏

1980年8月8日金曜、前日の灼熱の天候とは打って変わって、天気も少々曇りがちで、宿舎出発時に激しい通り雨に降りこめられた時、宿舎の玄関先で開かれたミーティングも、今言わせてもらえば正直言って耳に入らず、ただ雨空をうらめしく思っているばかりだった。それと言うのも、この試合は中国遠征での最終戦であり、我ら高等科チームの出場できるエキジビジョンゲームも組まれていたからである。

大学生の、最終戦にかける気迫のすごさも、その時のミーティングに見られた。小林さんや野崎さんらＯＢの熱っぽい注意と、それにうなずく大学生の真面目な顔つきは、僕が大学ホッケー部と関わりをもってこのかた見たことも聞いたこともない、本物の“緊張„ぶりであった。

一方、高等科生も、初めて国際試合に出られるというひきつりがあったろうが、少なくとも自分だけはそういった試合前の緊張感に恵まれなかった。自分も中国選手と試合ができる！という実感が湧いたのは、試合場であの大観衆を目の当たりした時で、この時襲って来たひきつりは試合前のも伴なった倍満ものとでも言うか、目がくらむほどであった。

さて、記念品交換が終わり、ホイッスルが鳴って第一試合が始まった。北京での第一・二戦、この第一試合と大学生の奮戦ぶりを見て、どうも日本での学習院大学のラフさのないのが気になった。やはり皆さん日中親善が頭の中にこびりついていたのか、なにか全体的プレーに、相手に対する気がねというか思いきりのよさ、ラフさに欠けていた。

相手チームはインターセプトがうまいとか、どのコースのパスが多い、どこでどういったカットインをするなど、いろいろな点を大学生の試合を通して見て、多少なりともエキジビジョン・ゲームに生かそうと思ってはいたものの、実際試合になると筋書きどうりには一つも行かなかった。

１－４で終わった第一戦に続いて、いよいよエキジビジョン・ゲーム。高等科チーム初の国際試合である。

大学の試合記録をつけるので気づかなかったが、ふと後ろをふり返るとスタ

ンドいっぱいの大観衆、もちろん大感激したことは言うまでもない。だいぶ緊張しながらセンターに立つ。ブリーをするスティックが、ガラにもなく震えた。試合がはじまると身の震えも止まったが、それと同時に自分の足も止まってしまった。お粗末なことに、相手はすでに一試合終えた後なのに、なんと素早い動きなのだろうか。なんと強靱な人間たちなのだろうか。ボールが出されてから走り出しても追いつく脚力、パスのコースを読む力、そのコースに入りこむ俊敏さ、シュートの素早さ、どれ一つとっても、驚異的である。

試合内容をふり返るが、自分の眼からはそうひどい、一方的な試合ではなかったと胸を張って言えると思う。もちろん、相手チームが一試合終えた後で疲れていたことが原因であったろうが、学習院チーム二軍の敢闘ぶりも、幾度となく相手陣地をおびやかした事からもわかってもらえると思う。個人的には、僕一人が少々、ドリブルがまずかった事と、味方ＲＷへ、自分が試合前に注意され、考えていた様なパスが実際やってみると通せなかった為に、チームの癌になった事を自覚している。

なんと、唯一のシュート・チャンスを、それもキーパー一人しかいないサークル前で失敗して得点をのがしたのも、誰あろうこの私だったのである。この結果、エキジビジョンゲームも０－５で破れた。

監督が試合前に、「とにかく、心残りのないような試合をしろ。」とおっしゃた言葉が、ひどく胸に残っていて、あのシュート・チャンスをのがしたことが唯一、この試合で心残りとなってしまった。

だが、試合が終わると、中国人も日本人もなく、観戦して下さった二万人もの人たちの拍手に、スポーツに国境はないという事をしみじみ感じ、つくづくこの遠征に参加できたことの喜びを味わった。

最後になりましたが、この夢のような中国遠征に、高等科ホッケー部員の一部ではありましたが参加させていただき、高校生にとって忘れることのできない体験をさせて下さった飯坂団長・飛田監督・竹口・横溝さんをはじめとする先輩・ＯＢの方々に、高等科ホッケー部を代表して深くお礼申し上げます。

留学生寮の女性と少年

高等科２年　水谷　吉男

今回の中国遠征は、まだホッケーを始めて１年半にも満たない僕にとっては大変に意義深いものでした。

大学と合同の練習や合宿によって遠征に備え、いざ出発の時になって僕の頭の中に浮び上がったものは、はたしてこの遠征でそれなりの成果を上げることが出来るかどうかと言うことでした。

50周年を迎えた学習院ホッケー部の代表として、我々のために色々と苦労して下さったＯＢの方々の分まで務めを果さねばならぬこと、そして中国へ行けば自然と日本の代表となってしまうなどの中で、高等科生である僕に、はたして大学生の中に混じって立派にやっていくことが出来るのだろうかと不安でした。時には、この遠征はぼくの考えているほどのものでは無い様な気さえしたくらいです。

この思いは、遠征最中にも時々感じられました。

しかし、今になって感じることは、それらの心配がまったく無駄なことであったと言う事です。

北京体育学院ホッケーチームとの合同練習や試合、わざわざ丸一日をかけて列車でやってきた内蒙古チームとの試合、それ以外の時間にびっしりと組み込まれた観光、予定外であった、内蒙古へ飛び、内蒙古チームと再度試合をするなどの、ハードなスケジュールの中で、心に強く残っているものは、多くの場所を観光したり、色々なことを体験したことよりも、むしろそれらの場面ごとに出会った人々との触れ合いでした。

その触れ合いを思い起こしてみて、あらためて今回の遠征は、我々にとって意義深いものであったのだと感じました。

特に印象に残っているのは、通訳のウーさんとハンさん、体育学院や内蒙古のホッケーチーム、中でも歓迎レセプションで同じテーブルであったり、一緒に写真を写したりした人達、そして体育学院の学生寮の食堂で色々と世話してくれたあの少年と女性です。

少し怖い感じのするウーさんとやさしそうな感じのハンさん、対照的な二人

の通訳、日本と中国の色々なことについて話したり、数人でいっしょにおかしなことを話しながら騒いだり、なにしろぼくらが中国に居る間、すべての行動を共にし、通訳として働いて下さった彼らのことは、無意識の内にぼくらの心に深く残っています。

中国のホッケーチームの人達、二チームで40人ほどはいたと思いますが、一人一人の顔は記憶していないとしても、特に印象に残っている数名を中心として、全体的な彼らのイメージと言うものは、忘れていません。

そしてなぜだか強く印象に残っているのは、体育学院学生寮で、我々に食事を運んで来てくれたあの少年と女性のことです。

食堂に入って僕等高等科生が微笑みながら頭を下げると、彼らも楽しそうにそれに応えてくれます。色々な料理を運んで来てくれる度に、「シェシェ。」と言うと、親しげな笑みを浮べておじぎをしてくれました。

こんな事がありました。彼らにごちそうさまを言おうと、前もって調べておいたものをしっかりと覚えて、食後に堂々と「チェンハオチー、シェシェニー」と言ったところ、彼らはきょとんとした様子で、手を振り、わからないと言うジェスチャーをしました。

翌日、紙に中国語でごちそうさまと書き、それを示してもう一度「チェンハオチー、シェシェニー。」と言ってみたところ、彼らは顔をしかめてその文字を読み、やっとわかったと言う表情で、その文字を読み返してくれました。まったく発音が違うのに今度は我々がとまどって居ると、再度ゆっくりと読み直してくれました。けれどもぼくらはその言葉をまともに発音することが出来ませんでした。

この様な事がきっかけで、会う度に微笑み合い、意味が通じなくても言葉が途切れるごとに、楽しくジェスチャーで会話をかわし、気づかぬ内に僕等高等科のテーブルに、彼らは欠くことのできない友達となって居ました。

短い期間ではあったけれども、今回の遠征で得ることのできた中国の人々との触れ合いの一つ一つは、ぼくにとって大変に大きなものであった様な気がします。そしてこの触れ合いと同時に色々な場所を観光できた事や、２万と言う大観衆の前で試合ができたことなど、数多くの体験をもう一度思い起し、高校時代の一生の思い出にすると同時に、今後ホッケーを続けていくうえで、又、

日常生活の様々な困難をのりこえていくうえでの、一つの糧としてゆきたいと思います。

懐かしの北洋汽水

高等科2年　小沢　博人

成田に向かう車中から見る雨は、私に大きな不安を覚えさせた。（あれっ、家を出た時は、晴れてたのになぁ。）

成田に着いても雨は私のそんな不安をよそに、一層激しく降り出した。（ちぇっ、畜生俺の門出を祝ってくれよ、なぁ。）

やっとの思いで旅館に着き、一安心。（ああ、腹減った。せいぜい飯でも喰うか。）と、思いきや、おかわりは殆んどなし。（どこまで俺をなめてんのや。）暇つぶしにテレビを見ようと思えば、誰も金を出さない。（たまらんね。）結局、私が百円を渋々。

翌日、外は相変わらずの大雨である。眠い目をこすり、半分、無意識に行動している自分が怖かった。あっという間に空港へ。あの何とも言えぬ空港の雰囲気の中で、いやでも遠征を過剰意識してしまう。

滑走路の起伏を感じているうちに物体は一気に自動車から飛行機の域に達した。

長時間の飛行を終え、いよいよ高度を落としていく。久しぶりに感じる大地。大陸に来たという感動。しかも晴れている。

口ではうまく言い表わすことはできないが、中国の匂いは、日本のそれとは違った。空気も、雰囲気も。（これが中国だ。）

まわりの中国人が、我々を奇異の目で見ている。

歓迎バスに乗り込む。

「あなたの　お名前は、何というのですか。」と私は突然、尋ねられた。

「オザワです。」

「オザワさんですか。どんな字でしょう。」

「『小さい』の『小』に『さんずいの沢』です。ところであなたは？」

「私は範というのです。」
と言って彼は自分の手のひらに指で字を書いた。その言葉はとても丁寧で、表情はにこやかだった。初めて知り合った中国人の範さんのお陰で第一歩を好印象で踏み出したのは幸運だった。

宿舎に着く迄、私は彼からいろいろな情報を得た。最近、中国で日本語を学ぶ人間が急増したこと、中国が日本のいろいろな技術を取得しようとしていること、そして中国の人が、真剣に中日友好を考えていることなど。私はそれを聞いて、とても嬉しかった。

初めて相手チームを見る。とても大きくて強そうだった。スパイクを使うホッケーが珍らしく、グランドも日本とは全く違っていた。実際には試合はしていないが、見る限りでは、持久力も瞬発力も目を見張る程、素晴らしかった。

生活のことだが、何と言っても主役は中華料理。日本で食べているのとは違い、真に本場ものといった感じ。質、量とも大感激だった。水がないのは苦しかったが、中国茶と北洋汽水（ジュース）、まあ口に合った。

部屋も２人ずつと、理想的であった。しかし、昼はせみ、夜は虫に随分と驚かされた。

この遠征で、数々の観光をしたが、特に万里の長城が印象的だった。自らが自らの足で上空の霞に近づいていくのであるからおもしろい。大地の広さと規模の大きさには驚くばかりだ。

しかし何と言っても一番の想い出は、２万の観衆の中でのゲームだった。何か、自分がとっても偉くなったような気がした。あまりいいプレーができなかったが、一生懸命やったので悔いはない。

いろいろ書いてきたが、こういう素晴らしい想い出がつくれたのも、たくさんの人の努力がもとである。本当に有難いことである。

大学生やＯＢとも仲良くなれ、中国人と膚で接し、とてもいい遠征だった。一生懸命練習してきて、つくづく良かったと思う。また同時に、これからもますます努力することを決心して、筆をおく。

芸能部長から見た中国

高等科２年　汲川　隆信

二学期が始まり、休みボケもほぼ直りかけた今、大学ホッケー部の中国行に参加したことを振り返ってみると、様々な思い出が甦ってくる。思えば高等科から参加した６名は、それぞれ科会にかけられ、学校側が行かせて下さるかどうかわからず、不安におののいたり、訪中前の合宿では、練習について行けずに中国へ連れて行っていただけないのではないか、などとずいぶん心配したがなんとかそれらの難関を突破し、中国行が決まった時は、飛び上がりたいほどうれしかった。

特にホッケー歴は５ケ月足らずで、成績も決っして良くなかった私にとっては、先の二つの問題を乗り越えられたことは、言葉などで言い表わすことのできないほどである。

８月２日、午後４時、東京駅のホームに、遠征メンバーは集合した。ＯＢの方をはじめとして、高橋新太郎先生や、女子マネージャーさん達、それに父兄の方々が見送りに来られた。監督の飛田さんをはじめ、主将の高井さんや、他大学生の顔には、「やるぞ!!。」といった決意が表われていた。

８月３日９時、私達を乗せたＪＡＬ７８１便は、中国へ向けて飛びたった。中国という、私にとって未知の国に対する夢は大きくふくらみました。

12時40分（現地時間）、北京空港に着陸しました。中国の地について、最初に感じたことは、土くさい中国の匂いがしたことです。その匂いは私の心を晴やかにしました。

はじめて中国の選手を見たのは北京体育学院の選手達でした。

彼等と挨拶をかわした後、軽い練習をしました。着いた早々、練習を始めたことからも、この遠征に対する意気込みが、とても強く感じられました。

体育学院の選手達の第一印象は、とても足が太い、ということです。短パンから、グッとはみ出た彼らの太ももを見た時、私達よりずっと足が速いだろうと思っていました。

試合で予想以上の足の速さにはおどろきました　大学チームは、それでも試合を押しぎみに運んだのですが、善戦及ばず、３対０で負けてしまいました。

もう一つの対戦チームは、内蒙古チームでした。場所はやはり、北京体育学院のホッケーグランドでした。彼等は長旅での疲れも見せず、体育学院の選手達以上の足の速さと、攻撃力を見せ、ちょっと力の差を感じました。

彼等のライン際でのスティックさばきや、サークルに入ってからの攻撃は、私達高等科のホッケー部員にとって、とても勉強になりました。

中国での思い出は数知れません。北海公園も見ました。天安門広場も歩きました。北京烤鴨店でのレセプションで、とってもおいしかった北京ダックもごちそうになりました。雑伎団も見に行きました。

内蒙古へ行くために乗ったプロペラ飛行機、内蒙古で開かれたレセプションで、ちょっぴりなめた中国のお酒の味、万里の長城からの雄大な景色、北京動物園でのパンダまで、思い出は絶えません。

しかしなんと言っても最大の思い出は、内蒙古での試合です。二万人もの観客の目の前で、私達高校生までが、試合することができたのです。こんなにうれしいことはありません。私達は精一杯戦いました。結果は5対0で負けましたが、私達の心の中には、さわやかな風が吹いていました。

高校二年生の夏休み、生涯忘れることのできない思い出となることでしょう。

最後に通訳して下さったりいろいろとお世話になった、範さん、于さん、飯坂先生や大学生、その他の皆様、参加することを許可して下さった、科長先生や主管の先生、本当に本当に、ありがとうございました。

プッシュ・イン

高等科2年　小田　洋彰

高等科二年である僕にとって、実に幸運な機会が与えられた。学習院ホッケー部にとって、二度目の海外遠征である今回の中国遠征に参加して8月3日から8月11日まで中国の国土を勉強しながら、国際親善として中国チームと対戦し、又見学することができたのは、一生涯もう体験することができないかもしれない良い記念になった。

まず、中国ホッケーについて少し触れたいと思う。

中国は国際ホッケー連盟（ＦＩＨ）に２月の理事会で仮加盟し、８月４日に正式に加盟することになっていた。我が学習院チームは８月５日の内蒙古戦を筆頭に４試合を行なったのだが、実はそれが中国にとってＦＩＨに正式加盟しての最初の国際試合ということになっていたわけである。

いよいよ８月３日、成田空港を出発した時、生まれて初めて飛行機に乗り（その間４時間40分だった）、遙か下方の日本を見た。そしてこれから中国に向かうのだなぁと思いながら胸をおどらせた。

飛行機から降りて、大陸の大地を踏みしめた時は感激して何とも言えない気分になった。そして、北京体育学院の寮に到着。出迎の方達は非常に愛想がよく親切で、荷物を運ぶのまで手伝って下さった。

言葉が違う外国での経験がない僕にとって、食事の時など内心戸惑いは隠せなかった。

８月４日、歓迎会を開いて下さって、ジュースを飽きるほど飲むことができた。練習は北京体育学院の人と共に行なった。さすが資料に書かれていた通り、個人技術、スピード、パワー、何をとっても一流だった。

８月５日に内蒙古戦、８月６日に北京体育学院戦、中国の学生、社会人、子供、様々な人々が見にこられたが、残念ながら二試合とも敗れてしまった。

８月７日、内蒙古自治区に向かう。

空港を降りた時、見渡す限り大平原が広がり、いかにも蒙古という感じがした。

その夜歓迎会を開いて頂き、大変なもてなしを受けた。皆陽気に歌い、日中友好を確かめあった。同じ食堂で食事をしていたオーストラリアの人達も一緒に楽しんでくれた。

８月８日、４時から試合開始、何でも今日のために前売券が売り出されたそうだ。観客は思ったよりずっと多く、又副主席の御観戦とあって皆力が入った。

二試合目は、遠征に加わった高等科生としては唯一の国際試合であり、又遠征での最終試合でもあった。

しかし、残念にも又二試合とも敗れた。羊の肉を食べ、草原を走り回って鍛えた技術、体力に圧倒されたような気がした。

ただ、この試合で僕自身のプレイで一つだけ記憶に残ったことがある。それ

は確か後半であったと思うが、相手のボールがサイドラインを割ったので、プッシュインを行なった時、一度フェイントをかけてからボールを出すとそれが物の見事に相手の選手の間を抜けたことだった。外国の強豪チームに自分の一つのプレイが通用したと思った時、ものすごくうれしかった。

8月9日、内蒙古の人々に見送られて、再び北京へ向かった。僕の目で見た限りでは、国際親善の気持ちが最高潮に達したのはこの時であったように思える。

8月10日、中国に来て一番行きたかった万里の長城を登ることができた。とても急な坂道で、大変疲れた。霧に霞んだ山々は日本で思った中国の印象その物だった。

その後、明の十三陵を見学した時、同輩がこんなことを言った。「こんな大げさな所で眠っている人なんてうらやましくてしょうがない。明日の朝、目覚まし時計で起こしてやりたいよ。そうしたら、明日から明のゼロ陵になるなぁ。」彼にかゝっては明時代の遺跡も片無しである。

8月11日、北京動物園で、日中友好の印であるパンダを見た。

帰りは皆疲れ果てていた。

実は、この遠征が始まる前から漢文の授業で宿題になっていた中国の歴史のあらましを記した「黄河の水」を読んでいて、実際に自分の目で見てみると、今更ながら長い歴史の重みというものが、ひしひしと感じられた。

最後に、今回の遠征に対して、この貴重な経験を将来の糧にしていきたいと思うと共に、中国でお世話になった方々を始め、遠征を企画して下さったＯＢ・大学の先輩の方々に、厚くお礼を申し上げたいと思う。

迷子なりそこない記

高等科2年　若松　　健

北京空港に降り、大陸の土を初めて踏んだ時に「これが中国の匂いだ！」と感じた。匂いの次に感じたことは、自動車が日本製でないことだ。日本車ばかり見慣れた私たちには中国製の車が走っていることがなぜかめずらしい。中国

は自転車ばかりの国だとばかり思っていたのだが自動車はもちろん地下鉄まで走っている。中国の勉強は日本で充分してきたつもりだったのだが、こんな偏見がまだ残っている自分のおろかさに恥ずかしくなってしまった。

北京体育学院に着き、さっそく練習を開始した。久しぶりの練習だったので苦しかったが、自分は今中国で練習しているんだな、中国大陸の土をけって走っているんだな、と考えると苦しさを少しはまぎらわすことができた。

体育学院の寮だが、二人部屋で快適だが虫が多いのには正直いってまいってしまった。夜、近くで汽笛がボーッとひびいているのを聞いて改ためて感激してしまった。

やはり中国の運輸機関ときけば大陸横断鉄道といった鉄道が頭に浮かび前に書いた自動車などはあまりピンとこない。

今まで中国に着いた日の感激を書いてきたが、今度は訪中目的である中国チームとの試合について書こうと思う。

初戦は内蒙古チームと行われたわけだがこの試合で私は内蒙古の脚力に驚いた。戦法だが内蒙古はタテにパワーでおしまくる戦法で、またシュート力にも驚かされた。結果は2対7で内蒙古の圧勝。

次の北京体育学院との試合は前半は学習院のバックが安定していてなかなか北京のフォーワードにつけ入るスキを与えなかったが、北京は大事なところでSCをとり、それを確実に点に結びつけていたように感じた。

何といってもメインイベントはフフホトで行われた次の内蒙古戦ではなかっただろうか。この試合は内蒙古自治区の首都フフホト（私たちは飛行機でフフホトに行き、3日間、滞在した。）の総合グラウンドで行われ観衆約二万人の中の最高の国際試合だった。第一試合は大学のチームが戦い、第二試合はまさか自分たちが試合を、と思っていた高等科メンバーが幸運なことに内蒙古の人と、この観衆の中でなんと試合をしてしまったのだ！？

私は無我夢中でボールに飛びついたのを覚えている。結果は0対5で負けてしまったが、シュートやSCが結構多かったので自己満足ながら顔はほころんでいた。結局、我が学習院ホッケーチームは中国チームに全敗したが、得るものが大学はもちろん高等科にも沢山あったと思う。また今度こそというファイトも沸いてくる。

今回の遠征では北京より内蒙古での生活の方が私には印象深かった。それはやたら観光地ばかりあり、デパートにいけば日本人やその他の外国人ばかりいる北京より、どこか土臭くて、民俗的で、大陸的なフフホトの方が私は好きだからである。

フフホトのデパートで買物をしたとき私は女性用の人民服を買ってしまった。なにせ、ただでさえ日本人と聞けば人だかりができるのに、私が間違えて女性用を買ったと知ればもう周りは笑いの渦である。私はとても恥かしかったが、これが「ふれあい」というものだと思うと、嬉しくなってきた。買物にとまどって集合時間に1、2分遅れてしまった。集合場所にかけつけてみるとバスはどこにも見当らない。この何もわからないフフホトで言葉も通じない人に囲まれて、おいてきぼりをくったのだと思った瞬間、顔面蒼白、冷汗が額を流れた。

ある中国人が私の肩をたたいた。そして指をさした。その方向をむくとそこにはバスが停車していた。

「ありがとう!!」

ぼくは相手に通じない日本語を叫び涙がこぼれそうなのをおさえ、自転車にひかれそうになるのをシカトしてバスにかけこんだ。

中国人!万才!

あのオジサンがもし教えてくれなかったら、もし、親切ということを中国人が知らなかったら……。(少し大げさだと思うけど)

こんな素晴しいふれあいを与えてくれたこの遠征に感謝したい。ぼくはあの広い道路やめぐりあった人を絶対に忘れない。

内蒙古チームの人、たくさんの人をのせたトラック、あの広い天安門前広場、私の夢にはまだこれらが時々出没するのだ。

脇道を通りすぎた後に

心理学科4年　浜本　由美子

1週間ぶりに、八幡山のベンチにすわっています。3年以上も彼等がスティックを振る姿を見るために、あきもせずこの場所へ通っています。そして今、

時々訪れるこの場所は、相変わらず私の大好きな場所の一つです。

この夏、ホッケー部念願の海外遠征が、実現することになりました。私にとっても、4年目に入るホッケー部生活（？）での最も大きい最後の行事です。私は、しばらくの間、同行する、しないに頭を悩ませました。それがきっかけとなり、私にとって、3年以上の月日は何だったのだろう……と考え、3年間をふり返ってみました。

3年前の8月1日、傾きかけた古い部室の前で、キャプテンからのお許しをいただいて以来、“マネージャーとは何だろう”が、常に私のテーマでした。いろいろな事に悩み、笑い、少しづつ結論へ近づいていけるつもりでがんばっていました。ところが、今、何の結論も見い出していないことに気づきました。私はいったい何を得たのだろう……何がわかったのだろう……結局、あの頃と同じ場所で、足をバタバタさせているだけでした。しかし、悩んだこと、泣いたこと、楽しかったこと、その一つ一つを自分なりに受け入れ、その時、その時、できる限り精一杯がんばってきたことは、はっきりと今の私の中に残っています。そして、常にホッケー部に対する気持ちの新鮮さを大切にしてきたこと“わけもなく、この集まりが好き”そんな気持ちが私を動かしてきていたことが全てだったような気がします。

結果的には、様々な事情から、私は留守番の役になりました。確かに、これが3年前であったなら、実力行使をしていたでしょう。そのあたりに、私の悩みは、現在進行の形をとっています。しかし、私は、この遠征を目の前に控えて、大切な事に気づくことができたと思います。

八幡山のベンチに一人ポツンとすわって、夕焼の中でスティックをふるみんなを見ていると、心の底から何かふんわりとした温かいものがこみ上げてきます。私にも何かできるだろう。始めから終わりまで、それが全てだったような気がします。そして、気がつかない内に、一つ一つ何かを得ているのだと思います。

これが、私の結論らしくない結論です。これから先、もっと大きいつらい事が沢山待ちうけているのかも知れません。でも私は、こんな心持ちを大切にしていきたいと思います。それが、今の私に精一杯感じられることだから。

自　業　自　得

独文学科2年　濱口　孝文

ジリリリリ……。発車のベルが鳴ります。

「じゃあ、頑張ってこいよ。」

「うん。お前もお土産たのしみにしてろよな。」

「そうするよ。じぉあな。」

「じぉあな。バイバイ。」

なんの変哲もない、ごく平凡な会話が交され「成田行」の電車のテール・ランプを見つめる一人の男。まるで絵に描いたような遠征隊の見送り風景です。最初に「頑張ってこいよ」と言った一人の男とは、もちろんこのぼく。しかしちょっと待って下さい。このぼくは、まだＯＢでもなければ、ただの見送りの家族でもない。歴とした我がホッケー部の現役の一員なのです。本当なら当然「頑張って」こなければならないはずのぼくが、何故「頑張ってこいよ」になってしまったのでしょうか。

思い起こせば5月8日(木)、午前、早大東伏見グランド。その日、ぼくたちは午後からの立教との練習試合に備えて、立教が到着する2時間も前からウォーミング・アップを兼ねて練習していました。立教の選手がようやくボチボチ来だす頃、ぼくたちは2対1のまっ最中で、ぼくはバックに入っていました。内緒の話ですが、この2対1が相当長くて、正直なところぼくは「まだかいな、まだかいな」という感じで、白状しますが「試合前だっていうのによォー、なげェーなあ、早く終れェー」と、少々うんざり気味だったのです。そうこうするうち、やっとの思いで(？)ラストがかかりました。ぼくは非常によろこびましたが、もちろんそんなことはオクビにも出さず、心の中でこのよろこびを一人でかみしめるべく(あるいは、もう一人バックに入っていた仲間と分ちあって)クックックッと笑いました。「やった！ラストだァ！」とノコノコと出ていき、守る態勢に入ったのです。が、次の瞬間、ぼくは見事なワンツーで大きくぬき去られていたのです。もちろんラストのかかって元気イッパイの(?)ぼくは、一目散にゴールに戻りますが、敵もさるもの、右からエンドラインを鋭くえぐり、キーパーの出足を絶妙のタイミングでぬく、目の覚めるようなセ

ンタリングです。さて、そのセンタリングを、戻りながら逆をつかれるような恰好で茫然と見送ったぼくは、長年の経験から「あっ、もうこりゃあかん。」今、ぼくに出来ることといったら、逆サイドから猛然と突っ込んで来るもう一人の敵が見事にスルーするのを神に祈るか、もしくは彼がまったくの無人のゴールの4ヤードの幅をはずしてシュートしてくれるのを念じることくらいでしょう。しかし残念なことにぼくは敬虔なキリスト教徒でも、超能力者でもありません。ぼくは思いました「いいや、いいや、ラストもかかってることだし、フォーワードに1点くれてやろう。」でも、やはり現実はそんなに甘いものじぉありませんでした。キーパーから「あたれ！」の指示です。時すでに遅し、の感ありでしたが「まあ仕方ない、キーパーもああ言ってることだし、あたるか……」と、シュートが放たれるべき方向へ向き直った、途端、ガキッ！文字通り、脳天にヒビくとはこのことです。頭がい骨が42秒間、カキィィィーンとウェディングベルのように鳴り響いたものです。

これですべてが終り。左顎関節三カ所骨折。要手術。50日間の入院と、おまけに、骨折部所が悪く、これまた50日間のリハビリテーション、のハメに陥ったのです。すべて、「1点くれてやろう」がいけなかったのです。そんなこと考えているヒマがあったら、0.1秒でも早くあたりにいくべきでした。そうすれば結局ぬかれて1点を献上することはあっても、ボールにあごに強烈なキスマークをつけられるようなことにはならなかったにちがいありません。そんなわけで、ぼくは夢の(?)中国遠征も棒にふり、そのかわり、痛い手術と、退屈な入院生活と、辛いリハビリテーションの日々を、両手いっぱいにかかえこんでしまったのです。まさに自業自得とはこのことでしょう。事故とかケガというものは、どんなに偶然のようでも実は必ず、気のゆるみなりなんなりの原因、伏線があって、起こるべくして起こるものだということを、ぼくは大きな代償と引きかえに、身をもって体験したというわけです。

－気をつけよう　暗い夜道と　気のゆるみ－

ぼくが入院、リハビリという日々をすごしている間、チームは中国遠征を目標にかなりハードな練習、合宿を重ねたと聞きます。そして8月には、中国遠征を見事成功させ、また、親善試合、交流会、あるいは観光でと、中国という国、人々を、実地に見、聞き、話し、体験し、数々の貴重な経験を得、ホッケ

一の技術的にも、また人間的にも一回りも二回りも大きく成長して帰って来ました。ぼくは、そんなホッケー部の仲間たちに負けないよう、これからも頑張っていきたいと思っています。

王昭君そして大蒼原

横溝　宏昌

モンゴル語で『青い城』の意をもつ呼和浩特は、北京の西北西500キロ、ゴビ砂漠の東から南へ広がる大草原の中の巨大なオアシスの一つである。その呼和浩特の南をゆっくり南流する黄河の支流、黒河のほとりに、鳳凰が舞い降りたように、ゆったりとした小高い丘が浮んでいる。

砂あらしが襲いかかり、一木一草にいたるまで緑を埋めつくしたときも、丘は鮮やかな緑にいつもおおわれていたという。土地の人々は『青塚』とよび、憧憬と崇敬の心で、この青い丘、王昭君の墓を守りつづけてきた。

王昭君は、二千年余り昔、斎の国（現在の山東省）に生れた。名を嬙といい、昭君は字である。17歳の時、その父王穰は、漢 の元帝の後宮の宮女として差し出した。この時から昭君の哀しく美しい伝説が始まる。

古来から漢は、南下する騎馬民族の匈奴に脅かされ、これに対抗しまた懐柔することに多くのエネルギーを費やさねばならなかった。 竟寧元年（紀元前33）元帝は、匈奴１４代単于、呼韓邪に入朝を許した。「和睦の象徴とし、漢族の美しい女性を閼氏（エンシ）（妃）にむかえたい。」元帝はその申し出を快く承諾した。そして、昭君を選んだ。時に昭君１９才の春である。

元帝は、画士に描かせた肖像画を眺め、伽を命ずる官女を選ぶことをならわしにしていた。皇帝に召され、子を宿すことは自らはもとより一族の栄達は意のままである。

官女はあらそって画工に贈賄し、美しく描かさせ召されることを願った。

しかし、昭君は何も贈らなかった。画工は当然のようにつまらぬ女に描いた。

元帝は、呼韓邪に引きあわすため昭君を召したとき、驚き惜んだという。気品あふれる容姿と聰明な心、それは元帝が接したどの官女も足元にもおよばぬ

ほど美しかった。元帝は単于との約束を深く後悔し、帝を欺いた罰として、画工毛延寿を斬首の刑に処した。

と西京雑記にしるされている。

阜へのぼる。そして大草原を見た。大きなものは高い処から見た方がより感動的である。どこまでも続く大地が広がっている。視線は焦点を失い戸惑いを覚える。そして安らぎを求め、さえぎる何かを探しさまよう。しかし徒労である。

この地の太陽は、東の彼方から生まれ西の大地へ没するまで、決してその姿を隠すことはない。大地は重量感に満ち、そして静まりかえっている。動くものはない。奥行きの深い一枚の絵が横たわっているだけである。

眼をこらすと、小さな集落（人民公社）やポプラ並木がみえる。日差しが弱いせいか、薄い紗におおわれているようで色彩がにぶい。大地が色彩すら吸収してしまうのかも知れない。

それとは対照的に足元の廊廟は賑やかである。屋根や柱は濃い朱や緑に彩られ、額どりは紫である。人間が自然に対し自己主張しているようでおもしろい。

いつの間にか歴史の流れから弾かれる。時間が素通りし流れ始めた。その中に身を委ねる。

耳もとを過る蟬の声、我にかえる。二千年前の夏も蟬時雨が降っていたのかもしれない。大地は織りなす歴史の足音も、何事もなかったように吸収し包容してきた。そして沈黙している。

1963年に故毛沢東主席の名代としてこの地を訪れた董必武副主席の筆による石碑がある。表は蒙古語、裏は漢語で書かれている。

昭君自有千秋在胡
漢和親識見高詞客
各抒胸臆懣舞文弄
墨兌徒労

昭君は千年以上も胡に生きつづけている。胡と漢との和親について識見を高く持っていたのにもかかわらず、詩人は悲劇の女性と思っているがそれは徒労である。

単于に身をまかせた昭君の悲話は、古くから格好の時の題材となっている。

昭君払玉鞍　　昭君玉鞍を払う
上馬啼紅頰　　馬に上って紅頰啼す
今日漢官人　　今日は漢官の人
明朝胡地妾　　明朝は胡地の妾

匈奴へ旅立つ昭君をうたった季白の詩である。

そして長い旅路のはてに、見るかげもなくやつれた姿をうたったのは、白楽天である。

満面胡沙満鬢風　　面に満つる胡沙　鬢に満つる風
眉残黛鎖瞼紅鎖　　眉は残黛を鎖し　瞼は紅を鎖す
愁苦辛勤尽顦顇　　愁苦辛勤し　尽す顦顇す
如今返似画図中　　如今かえって画図の中に似たり

一説によると匈奴におくられる途中、黒河に身を投じたとも、父子二代に嫁す匈奴の慣習で呼韓邪の先妻の子に嫁し、一男二女をもうけこの地に没したともいわれている。

1923年に郭沫若の戯曲『王昭君』によれば、皇帝の権力に反抗し引き止める元帝を振り切り、自らの不屈の精神により匈奴の地へ赴いたという筋書になっている。

時代の遷りかわりとともに伝説は様変りするのであろうか。

幾重にも広がる波紋を思わせる。歴史の流れとともに、これからも昭君の伝説は広がりをみせるであろうか。

大蒼原は、母のもつ優しさで歴史をいだき沈黙している。

追　記

中国が国際ホッケー連盟加盟後初の国際試合、日本ホッケーが初の訪中、そして大学運動部が初の訪中という初めてが幸運にも三つ重なった。

この意義深い親善試合の成功は、中国大使館、二階堂進先生、学校関係者、

ＯＢ諸兄の御指導と御援助がなければ全くありえないことである。

この素晴しい機会を与えて下さった中国の皆様に深く感謝いたします。そして強化合宿において格別の御指導を賜った小林定義先生、高橋新太郎先生に厚くお礼申し上げます。

出発（たびだち）

竹口　友章

真黒な雲が、空一面おおっている。その黒雲から大粒の雨が容赦なく地面を叩きつけ、野原の中の巨大な空港の建物が、雨に洗われている。

１９８０年８月３日　午前７時、新東京国際空港は活動をしている。我々も、５時30分に起床し７時前に空港についていた。これからの９日間の旅に、なるべく余裕をもった行動をし、疲労を残さないようにという配慮からである。

横溝総主事の指揮のもと、荷物の点検と荷札をつける作業が始まる。記念品、スティック、個人の荷物など40個を超える量であった。

団長から簡単な挨拶、指示がある。

「試合には勝つこと、日本人として、恥かしくない行動をとり、そして９日後に全員無事に、この成田にもどってきましょう。」

私は、最後の点に最大の努力をすることを改めて心に誓った。

７時45分、日本航空団体カウンターへ移動を開始した。これから始まる海外遠征という大事業からか、学生の動きが少し鈍いようである。特に下級生の中には、自分がなにをすべきかわからないようで、ごく単純な細かい所まで言わなければならなかった。カウンターでは、横溝さんが手続にあたっている。ここでは、日本航空の方の配慮で、大変スムーズに通過することができた。そして空港利用税を払い、いよいよ通関手続に向う。

外は依然として大粒の雨が滑走路をたたきつけている。

通関手続は、初めての者もそうでない者も、多少緊張する所である。しかし20分少々で、通関手続が終った。記念品係が免税店に走る。

「日本航空　７２１便、北京行に御搭乗の方は、27番ゲートにお急ぎくださ

い。」

スムーズにいったようでやはり、時間をとられていた。買物を急がせて、27番ゲートに向った。この時9時少々前であった。

飛行機はＤＣ８、かっては大型のジェットであったが、超大型ジェットの出現で多少手狭という感じである。座席は中央の通路を挟み左右三列ずつあり、私は中央よりやや後の、丁度主翼の付け根の所に、場所を見つけた。窓側に奥寺先輩、通路側に飯坂先生である。私は座席に深々と腰を下した。

思えば長い月日であった。最初に中国ということを聞いたのは、昨年の10月頃であったと思う。私事で恐縮だが、今回の副団長の飛田先輩に、私は仲人をお願いしていたので、その挨拶に行った時である。丁度そこに、やはり飛田先輩の仲人で結婚された、山田先輩御夫婦も見えていらしたので、三人であれこれと話しているうちに、中国遠征ということを聞いた。勿論その時は、雲をつかむようなもので、真逆こんなに早期に実現するとは思ってもみなかった。しかしその時から自分なりに、中国遠征というものを意識しはじめていた。

翌年、丁度ホッケー部50周年記念の準備の時に学生から、海外遠征をしたいと相談してきた。しかも、候補地として中国、他数カ所を掲げていた。さっそく私は他のＯＢにも相談をするように言い、韓国遠征で豊富な経験をもっていらっしゃる飛田先輩に協力を仰いだ。飛田先輩は快く協力することを約束してくださった。又、他の諸先輩の方々も自分たちの力でやってみろということで了承してくださった。

我々は、最初に中国とのパイプを見つけることからはじめなくてはならなかった。

中国大使館に行ったが、あまり好結果が得られなかった。私達はどうしても今夏に実現すべく、溝口先輩の御力を又しても貸していただくことになった。その結果、衆議院議員二階堂進先生と会うことができ、先生の御尽力により、我々の中国遠征がやっと実現するはこびとなった。

６月６日のことである。しかし、滞在費・その他の費用・宿泊施設等一切判らなかった。判っているのは、北京に滞在すること、相手は、北京体育学院、内蒙古のチームということだけであった、我々は、費用の点だけでも知りたいと思い、あらゆる手段をつくしたが判らなかった。徒々月日が流れるだけであ

った。それに加え飛行機の手配もうまくいかず、気ばかりはやる毎日であった。

丁度この時期、ＯＢの方々に大変御迷惑をかけてしまった。特に町尻会長には、ＯＢ諸先輩の方々への説得、又自らの手でＯＢへの文章を書いてくださり、我々一同なんとお礼を申し上げたらいいかわからない次第である。上田先輩には、協会関係などで、多々御指導していただき、黒川・内藤・中村先輩にもお忙しい中を私たちの相談にのっていただき、貴重な時間を費やさせてしまった。そして、この主旨に賛同し、多額の寄付をしてくださった多くのＯＢの方々、デサントの皆様、メダルを作ってくださった桐原さん、各運動部・文化部・女子マネージャー、そして私共若輩のものに、大事な御子息を預けて下さった父母の皆様、皆様方の御理解と御協力により、やっとここまでたどりつくことができました。本当にありがとうございます。心からお礼を申し上げます。

最後になったが、もう御一方お礼を申し上げたい方がおります。それは飛田先輩とその御家族の方々である。今回のこの遠征、私たちホッケー部に在籍しているものにとっては、大変意義をもつものであり、人生の一大イベントであるかもしれない。しかし、その枠より外にいる女性（主婦）にとってどうであろうか？

これはまさしく男のロマンであり、男のエゴであると思う。そのような事に、飛田先輩を一度ならず二度までも、かり出してしまったことに、本当に申し訳けないと思う。この場を借りて、心からお詫びの言葉を申し上げると共に、私の未熟さを反省している次第です。

しかし、今回の遠征も、飛田先輩がいなかったら実現は１００％不可能なことである。空に浮ぶ雲、そこから落ちる雨、みんな核になるものがあって、初めて雲になり雨となる。その核になるのは飛田先輩しかいないと思う。（次回からは、我々若い世代が引き継いでいかなければならない。）どうか御理解ください。学生諸君も、こういった目には見えない所で多くの人達が協力してくださったことを心の隅に刻みこんでほしい。

「ベルトをおしめ下さい。」

スチュワーデス嬢の、やわらかい声が、私の耳の遠くでした。私はかるく会釈をし、ベルトを締めた。飛行機が27番ゲートを静かに離れた。そして滑走路

へ向う。空港の建物がだんだん後ろへ移動していく。滑走路の端で、停止した。いよいよ離陸である。

「ゴゥオー。」

大きな音をたてて動きだした。

学習院ホッケー部25名と、その他多くの人の夢とロマンを乗せて。

母なる国"中国"へ。

追　記

中国遠征に際し、お世話になった、于再清・範玉明、そして体育総会、体育学院・内蒙古自治区の皆様に対し、深く感謝の意を表すと共に、両国の発展と友好が末永く続くことを祈る。

私の見た中国

奥寺　道彦

8月3日から9日間、学習院ホッケーチームの一員として訪中したことは、私の人生において決して忘れることの出来ない貴重な体験であった。7年前、現役選手として韓国遠征をしたが、まさか再び、海外遠征ができるとは夢にも思わず、まして選手として参加できるとは。現在でもOBで、選手として活動しているので、喜んで参加した次第である。

8月3日昼すぎ、小雨降る北京首都空港に到着。大陸、中国の第一印象は、空港から市内へ通じる道が、ポプラや柳の並木道で、まわりは一面とうもろこし畑、緑の美しさを、小雨がより一層鮮やかにしていた。やはり、「さすが大陸、広い」

空港から宿舎である、北京体育学院へ向かい、夕方、ホッケー協会の方々とスケジュールの打合せをしたが、試合の前後はゆったりとしており、ほぼ満足のいくものであり、むしろ北京を離れて、内蒙古での試合が含まれ、その配慮には感謝感激であった。

こちらの気候も今年は冷夏で涼しく、宿泊施設は留学生専用の寮で、設備が整っていてコンディションとしては十分すぎる程であった。それ程恵まれてい

たにもかかわらず、北京で二試合、内蒙古での二試合と内容の良い試合をしたものの、四戦全敗を喫してしまった。敗因は、一言で言えば中国の力強いホッケーに屈したと言える。ひとつひとつのプレーは単純であるが、それぞれに力強さがある為、こちらの組織プレーも通じず、例えば、強引に縦パスを通した時、走力の違いでＤＦが振り切られ、なおかつ敏捷性があるのでシュートのタイミングが早く、スピードと力に負けた様である。組織プレーについてはまだまだ未熟ではあったが、中国のホッケーの歴史がまだ4年足らずということもあり、北京体育学院の様に、スポーツ環境に恵まれ、国の援助がある大学であれば、数年間で強化できるし、（今春パキスタンのコーチを招いた）何せ、10億の国民がいる大国である、近い将来必らず、国際レベルになるであろう。

我々の反省は、プレー以前である基礎体力作りである。それについては、ホッケーを初めて見た中国人でさえ、感じた事で、我がチームについて、力強さが足りないと批評をしていた。

7年前の韓国遠征でも同様の事を言われたが、それは、日頃各自がわかりきっている事であり、その足らない処を組織プレーでカバーするのが、学習院の特徴でもある。

今回の試合でも内容的には必ずしも勝てない試合ではなかっただけに残念でならない。内蒙古代表チームの監督は、プレーについての我々の感想を熱心に聞いていたが、我々のアドバイスが少しでも役立てば、中国に学習院ホッケーの足跡が残り、これ程喜ばしいことはない。

今回の訪中で、ホッケー及び観光を通じ、感じた私なりの中国感は、「中国という国は、また中国人は、何とおおらかなんだろう」という事である。やはり大陸の大国という地域性からくるものなのか、それとも中国の歴史の古さ、偉大さからくるものなのか、我々日本人の島国育ちの持つ、こせこせした――部分など微塵も見られない。全くのんきで心にゆとりのある人が多く、何をするにしても、楽しくまじめにとりかかろうとする。その様なところから、彼らの殆んどが、我々に対し、この上なく親密感を見せ、熱烈に歓迎してくれた。

中国は今、四つの近代化実現の為に懸命である。国民全体が、同じ目標に向かって邁進中である。北京の街は、住宅、ビル建設工事が盛んで、丁度、日本の昭和30年代から40年代にかけての高度成長期に見られた様に、街全体が活気

に満ちあふれている。そしてその最終目標は、平和五原則にうたわれる。世界の人口の4分の1を占める中国ならではのこと。近年、中国の政治、文化、スポーツの国際交流が盛んなこともその為であろう。その過程において、今回、我々学習院のホッケーチームが、日本のホッケー史上初めて、中国のチームと対戦した事は、中国のホッケー界、更には新しい中国の国づくりに多少なり、役に立つものと信じて疑わない。またその様な時期に訪中し、自分自身の眼で建設中の中国を見たことは、何物にもかえがたい体験であったと思う。

数年後、天安門広場、故宮博物院、天壇公園、北海公園のまわりに高層ビルが立ち並んだ時、新しい中国が完成するであろう。名勝旧蹟とビジネス街の高層ビルとは妙な取り合わせだが、いかにも中国らしく、ロマンがあって何ともユニークではないか。北京では、北海公園の白塔から見下ろした紫禁城（故宮）の黄金色の甍の連なりが絶景と言われている。中国人のことだから、自然破壊はしないと思うが、新しい高層ビルの上から、この紫禁城を是非もう一度見たいものである。近くて遠い国であった中国だが、最近、日本との交流が頻繁である。中国の政治情勢など、中国国民より、むしろ日本人の方がよく知っている程である。それ程密になった日中間であるが、訪中する日本人に比べ、日本を訪れる中国人はまだ少ない。今度は是非、これからの中国を担う、北京体育学院、内蒙古の若い人達を日本に招待し、日本という国を理解してもらい、今後の日中両国の発展の為に、子々孫々に渡る友好関係を続けたいものである。

管　見　記

飛田　孝

中国

国土、歴史、人口どれをとっても私の体験や発想や感覚でとらえられぬ。

5千年前の黄河文明が今日までつたえられ、いつも一大世界をつくり、そこには神秘が必らずつきまとっている。そして我々の祖先は大陸文化とくに唐文化を尊敬しあこがれ、同化さえ望んだ。

古来から同文異種という。私の見た限り風俗習慣、何が同じなのかよく分ら

ぬ。ましてや歴史において。

もし同じなら、イギリスとフランスとドイツは一緒だ。

北京の街

千年のみやこ。森と池と蒼天。柳と槐とアカシアと蟬しぐれ。街並をぬければ空漠とした大地。

これを大都会として、理解できようか。

故宮（紫禁城）

白塔山からみる紫禁城、それは幻想だ。瑠璃瓦に陽があたり、そこだけが更に明るい。

天安門から宮殿に入る。むかし外国使節がここに案内されたとき、こう思ったろう。清の皇帝は幻術使いか。魔性の夢を見せられていると。

見上げる城壁は代赭、五彩の宮殿が続く地は大理石。

ひたすら蜃気楼の中を歩き続けた。

蒼天皓坤　煌瓦紅牆

万里長城

うわさによると月からもみえるという、不可思議な城。2千年もかけ6千キロもあるという。

明朝末期世代が乱れたころ、呉三桂将軍はここで南下する満州族の鉄騎兵と戦っていた。ところが、北京に残した愛妾陳円円が、反乱軍に捕われの身になったときく。とたんに戦闘意欲を失い、さっさと開城し北京に一目散。

国をあげ、財と人と年月を費やし完成した長城、何のことはなりたった一人の女のために、その使命を終える。

稜線をかけあがりかけおり、南に北に流れのごとく続く、蜿々とは長城のみに許される語だ。

中国を象徴する記念碑、これにまさるものは火星の運河のみ。

北京の街角

白い開衿シャツ、紺のダブダブズボン、ビニールのサンダル、陽焼けした顔、アブラッ気のない短い髪、これが標準的な中国人。

うごめき渦をまきながら、道路にバスがあふれながら動きまわる。

なるほど世界人口の4人に1人は中国人であるがうなづける。

人民公社や自留地から運ばれた食料品が、道路の端にうず高く積まれている。それに群がる人達は屈託ない。特に子供達の明るく表情豊かな愛くるしさは印象的。

5年たったらどうなっているだろう。内外から押寄せる変革の波は強い。

文化大革命が終って4年、それほど中国は激しく動いている。

――民族文化宮――

ラメ入りのロングドレス、マニキュアはしてないがガラスのイヤリング、そして髪はかるくウエーブ。

歌姫から客席に新しい光がほのかに差し込んでいる。

エーデルワイス、ジングルベル、郵便馬車、そして中国の歌。

観客が笑いこける、たずねると「恋の歌」、今度は笑いと拍手、鄧小平語録から「黒猫でも白猫でもネズミをとる猫がいい猫だ」。

歌姫をながめる眼はかがやき、うっとり耳をたてている。

文明と文化は欧米しかないと思いつつ、子供の頃みた洋画をなつかしく思い出す。

――呼和浩特――

太陽は大地から昇り、大地に沈む。そこには空よりも広い大地があった。

むかし、この地を旅する人は何を目当てにしたのだろうか。となり村にいくにも羅針儀が欲しいほどである。僕等は、大地に酔った。

学習院チームが試合をするに、入場券が売られ招待券が配られる。

2万人の大観衆が、副主席が、秘書長が、そして多くの要人が観戦する。ホッケー冥利極まる。

あざやかな手綱さばきをみせてくれた成吉思汗の子孫達は、今何をしているだろう。

馬頭琴をひきながら青城酒を馬乳酒(クミス)を酌み交わしているのか。

彼等の遠い祖先は、かって東洋と西洋を同じ次元でとらえ、幾百もの世界を一つの世界にした。そしてここから新しい世界史が始まった。

尽きぬ思い出を青都呼和浩特は、惜しげもなく与えてくれた。

中国遠征で得た事

小林　進

私は、48年の韓国遠征と今回の中国遠征と2回に亘り海外へ、現役とOBといった違いはあったが、選手として参加させて頂き幸運でありました。2回の遠征とも行くまでは、相手チーム、それからグラウンド、気候といった環境などについて、未知な事ばかりであった。そして試合結果は、残念ながらどの試合をとっても完敗であった。2回の遠征を通して云える事は、親善と云う事で我々をまるで日本の代表チームの様に歓待してくれた事、その為にスケジュールがハードになり過ぎてしまった事、海外と云う事で行く前の下準備などで選手は練習不足ぎみであった事などが揚げられると思う。

私も練習不足の為か、今回の中国遠征では、第一試合で足を負傷してしまい、残りの試合は殆んど観戦に終ってしまったが、中国のチームと学習院のチームとを比較して観る事が出来た。そして我々のチームに関して反省する事もいろいろ出て来た。

まずちょっとした事ではあるが、気の付いた事を書くと、北京体育学院と合同練習をした折に、ランニングなどの時、我々は気合を入れる為、声を掛け合うが、それを聞いて彼らは笑う。日本ではあたり前の様に思うが、彼らは練習中あまり声を出さない。しかし、真剣である。それから練習用のボールには驚いた。野球の硬球の上に布製のガムテープみたいな物を巻いて使っている。昔は日本もそうであったのかもしれないが、今の恵まれている我々にとっては考えられない事である。しかし反面この気持はホッケーのみならず、見習うべきであろう。

第一戦内蒙古のチームと対戦する。前半皆アガっているのか、動きが悪くてあっと云う間に得点されてしまう。グラウンドもあまり良くはなかったが、そればかりではなかった様である。相手チームの実力を、関東学生リーグと比較するのは難かしいが、そのスピードだけを取り揚げると、一部の上位の実力があると思われる。フォーメイションにはあまりこだわらない様なので、サイドから攻めればもっと有利に試合展開が出来たのであるが、それが生かせたのは、後半になってからであった。

第2戦は北京体育学院チームであるが、このチームもまたフォーメイションプレイはあまりしてこない。しかし、ヒットの強さと、縦に割って来る脚力は、我々より数段優れていた。中でもFWに2人程素晴しいドリブルをする選手がいたが、そのスピードとスティックさばきは、今でも印象に残っている。

第3戦は、内蒙古自治区まで行き内蒙古のチームと対戦した訳であるが、この時はとにかくその脚力に圧倒させられてしまった。とにかく速い。学生の一部の試合を見ていてもなかなかお目にかかれない程の足である。従ってコーナーへ打たれた球は、ことごとく追いつかれ、ディフェンスの裏へ廻わられる事が多かった。

これら4戦を通じて、中国のチームは、荒けずりではあるが、その体力とスピードに関しては素晴しく、完全に圧倒されてしまい、我々のチームがその持ち前のフォーメイションプレイを生かせなかったのが残念であった。と云う事は、基本的な事ではあるが、走る事なしに、フォーメイションプレイは無いと云う事である。今時こんな事を言うのは、おかしいと思われる方が殆んどでしょうが、近年我々学習院のチームは、フォーメイションに気を取られていて、この走ると云う本当に基本的な事を忘れていたとまでは行かなくても、力の入れかたが少なかったのではないかと、考えさせられました。

唯、今回対戦した中国のチームが、全然フォーメイションを無視していたかと言うとそうでもない。フォーメイションの基本である2対1の壁パスを、ここぞと言う時には、使って来る。見ていると、誰かに教えられたと言うよりは、自然に体で覚えた様にさえ感じさせられる。韓国に行った時も感じた事だが、基本の基本である体力、特にホッケーでは脚力をもう一度見直して練習に励まなくてはならない。今回の中国チームと対戦して、現役学生が一人一人どの様に相手チームを見たかは、それぞれ個人個人違うだろうが、各自が、それを自分のプレーや、後輩のプレーに生かして頂きたいと思う。

我チームの戦い

野崎　博典

韓国遠征したのは、大学２年の夏である。あれから７年、私のホッケー生活の中で感動的であり印象的な思い出となっている。その素晴しい思い出を、今度は中国ということで学生に与える機会をもちえたのは、更に幸である。

昨年念願の一部に復帰したが、部員難は相変らずであった。しかし選手の資質は高く、気持はもりあがり新しい歴史を創るということからも、中国との親善試合は監督就任４年目である私の役目と考えた。

親善試合で必らず１勝し、また秋のリーグ戦で、部５０年の歴史に、中国遠征に、愧じない成績をあげるのが、格段の配慮と援助を与えて下さった方々への恩返えしであり、またチームの真の目標であると誓った。事実その確信は十分あった。

中国選手に初めて接したのは北京体育学院のグランドである。グランドは広大なキャンパスの一角にあり、宿舎から十分位歩いたところにあった。その途中にはあらゆる運動施設（サッカー場だけで１２面ある）が取り揃えてある上に、ホッケー場の周りだけでもあと２面以上はとれる程の広大な空地におどろかされた。ここで練習する選手が羨しく、もし学習院にこれだけの敷地があれば、もっとスポーツも盛んになり、各部もずっと良い成績があげられる筈である。学習院の現状を思うと残念である。

着いた日に、先方の要望もあり合同練習をすることになった。中国ホッケーに接するのは勿論、特に選手の資質に接することに非常に興味があった。

学習院方式でやることになり、打合い・２対１・３対２と進んだが、ストップやヒットは飛び切り上手とは思えなかった。しかしガッシリした骨格、引き締った筋肉を使った動きは、敏捷性卓抜で、さすが全国から運動能力の長けた者を集めた感を強く感じた。

候正慶監督に「私のチームは創立４年目、まだレベルは低いので、歴史と伝統の豊かな学習院に悪い所を指摘し指導してもらいたい。」と言われた。「飛んでもない。歴史は長いから良いのではなく、何を積み重ねて来たか、またこれから何を積み重ねていくかが問題である。だからお互に切差啄磨しより良い

ホッケーを築き、両国の友好を推進するのが、この訪中の目的である。」とこたえると、候監督は大きくうなづき真白な歯を見せ、私の手を両手でしっかり握った。

このとき中国へ来たこと、ホッケーをやってよかったこと、親善試合の素晴らしさが涌きあがり、納得の行く試合をしなければと強く感じた。何といっても国際親善試合の目的と成果はここにあるのだと思う。

第1戦（内蒙古チーム）は2点は返したものの、緊張と相手のタテに打ってくる戦法になすところなく敗れた。2戦目（体育学院）も1戦と同様であったが、学習院のパスがFW間、HB間あるいはタテにFB — HB — FWとつながらず、また、得点チャンスも何回かあったが結局3－0で敗れた。

3、4戦は内蒙古を訪問し試合することになり、試合の興味はもとより、蒙古の大草原の一角で試合することに別の大きな興味があった。

今までの2戦では内容的にそう大差があるとも思えず、頑張れば5分程度まで持ち込めそうな感じがした。したがって飯坂団長以下、「今度はなんとしても勝とう」という意欲はみなぎっていた。

そのためホテルに着き一旦は休息したものの直ぐにグランドに向った。グランドはバスで十分余りのところで、着いてびっくりした。国立競技場まではいかないが、高い観客席が四周を取り囲み満員になったら4万人は入ると思う位の広大さである。メインスタンドには、我々を歓迎する旨の横断幕がかかげられ、内蒙古の人達の歓迎ぶりと意気込みが強くあらわれていて、改めて感激した。

その夜、心あたたまる歓迎宴を開いて下さり、大いに楽しい友好のひとときを満喫した。

翌日の試合のことが脳裏をかすめたが、あまりに上気嫌になってしまい、ついつい翌日のことを考えるのをよそうと思った程素晴しい内蒙古の夜であった。翌朝の皆の顔は、昨晩の余韻を残しているのか疲れが見え、後にこのことが試合結果を左右したかも知れぬというのは、私の浅はかな弁解であろうか。

万全を期すため十分な休養をとり、たっぷりミーティングをしたのちグランドに向った。雨がパラついたせいか適度の湿り気があり昨日よりグランドコンディションはずっと良い。観客は2万人というし、これは予想をはるかに超え

た数である。何としても良い試合をしたいと思った。

緊張のうちに試合が始った。必勝を期して我々は戦った。押され気味であったが、３戦目のせいか中国ホッケーの動きにある程度馴染み、早い動きにつけるようになり、シュートチャンスも何回かあった。しかし得点はできず、立上がり早々に決められたＰＣの１点のみで前半は終った。

迎えて後半、内蒙古は持前の脚力とタテパスを強引に打ち、それがタイミング的に合い始め学習院のディフェンスラインを突破される回数が多くなってきた。疲れのせいかＦＷのバックタックルの威力がおとろえ始め、中盤の球の支配が減り始めた。またサークルに入ると強引にヒットでゴールを狙われ、何とかタックルに出るが、スティックの振りの早さ、強さは抜群で、日本での動きの感覚では遅すぎて通用しなくなってしまった。一方バックスからのクリアボールを何とかハーフ又はインサイドを中継し、外側攻撃で相手サークルに入ろうとするが、相手の早い動きにカットされ、どうしてもうまくつなげることが出来なかった。そして奪われなくとも良い球をみすみす敵に渡してしまう場面が何回もあった。

結局後半は、強引に持ち込まれた球を上手に得点され３点、学習院はＰＣを決めたのみで健斗空しく４－１で敗れてしまった。

中国チームは北京、内蒙古もそうであるが、組織プレーやプッシュを利用し、つないで来る攻撃はしない。またＨＢを中継点にしＦＷにつなぐプレーも殆んどない。しかし、秀れた運動能力と体格に裏打ちされたセンスの良さは素晴しいものがあると思う。

学習院にＤＦの粘りとＦＷのシュート力がもう少しあれば、もっと満足のいく試合ができたと思うと残念である。

しかし、学習院としては持てる力を十分発揮できたし、又中国チームのあの早い動きについていけたのだから、秋のリーグ戦にこれを十分生かし良い成績を残すのが我々の義務であり、又中国各チームへの恩返えしであると思う。

私は前回は選手として韓国を訪問し、今度は副監督兼選手として２回の海外試合を経験することができた。これは望外の幸せである。

歴史・国土等私の想像をはるかに超えた中国で思う存分試合をし、また万里長城、故宮博物院等世界一の建造物を見学する機会に恵まれ、本当に感激の連

続で、全てが生涯最大の素晴らしい思い出となって涌き上がって来る。

最後に中国の皆様とこの企画に尽力して下さった町尻会長、溝口さんに深くお礼申し上げます。

ひとりごと

浜本　由美子

「ガンバローネ!!」と彼等に心の底からいえるマネージャーになりたい、と思い続けて4年間。心の中ではいつも彼等と同じ様に頑張ろう、と思っていたのに出てくる言葉は「ガンバッテネ!!」でした。それが精一杯であった私にとって、この些細な言葉の違いが大きな悩みであり、闘いでもありました。

私達の最大の遠征を留守番役で終えた今、また一歩、「ガンバローネ」に近づいた気もします。それでも結論めいた事は今だに見出せないままです。そんな事の繰り返しでした。しかしマネージャーにとって、又私にとって、そういう葛藤や想いがすごく大切なものである様な気がします。そう信じて歩いてきた4年間だったから。

そして今……キラ星の様な彼等に向かって、何のためらいもなく、自信をもって「ガンバロウネ!!」といえる日を……相変わらず……夢見ています。やっぱり彼等と一緒にいる時が一番幸せであり、ホッケー部は私の心の中で一番の宝物なんだナ、と思います。そういう「想い」が私の素晴しい青春の証しなのだから。

留守居役のタメ息

溝　口　泰　男

飛田君から「中国遠征を実現して欲しい。」と懇願されたのは丁度1年前の夏のことであった。即座に「ＯＫ」といいたかったが、7年前の韓国遠征のことが急に想い出されて、即答することに躊躇いがあった。 ―というのも、かって私は胃の痛むおもいをしたふらだ。

若い後輩諸君が外国の地でホッケーを通じて親善を深めることに異存はない。ホッケーだけでなく、相手の国の文化に触れ、若者同志で語り合い、正しく相手国を理解することは、ひいては自分の国に対する〝新しい目〟も養われ、国際人としての体験も積めるわけだ。

しかし、その裏方に徹する人間には、それなりの不安がいつもつきまとう。見知らぬ外地で、もし後輩諸君が事故でも起こしたら、あるいは病気にでもなったら、遠征費用は、パスポートは、答礼は、外交ルートは、相手チームは……etc。

特に健康については神経質にならざるを得ない。韓国の場合は、夜の12時以降は、外出禁止令がある。病気になった場合、救急車は来てくれるのだろうか―などと思うと「北海道にでもしたら」ということになりかねない。試合に行く選手たちの不安や期待と、裏方の不安とは、いつの場合でも大きな隔たりがあるようだ。韓国の場合は、むこうの国務大臣に電話をかけ、不測の事態が発生した場合には〝特例〟をという裏づけをとりつけたほどだ。

しかし、結果的には、それも杞憂であった。真黒に日焼けして、ニコニコ帰国した時にはやっぱり心の底から「ヨカッタ」と思うのである。しかし、出発してから帰国するまでの間は、幼い我が子を長旅に出した父親の気持ちで何回か太田胃散のお世話になるのである。

今回の中国の件に関しても、発想の面白さとスケールの壮大さには賛意を表せても、さて、その裏方の仕事を考えると頭が重かった。ましてや中国ともなると実情の把握が極めて困難であるし、中国そのものが現在その歴史の上でも大きなウネリを起こしている最中である。国交が正常化したとはいうもののまだ時間が浅い。まだまだその殆んどの部分が未知の世界である。北京や上海な

どの主要都市以外のところは、ＴＶジャーナリストとしても適確な把握は、困難を極める。

しかし、それも飛田君や学生諸君の熱意に押されて行動を起こしたところ、特別外交ルートを通じて、トントン拍子に学習院ホッケー部中国訪問が実現したのである。

時機もよかった。亡くなった大平首相には申し訳ないが、同首相の葬儀に参列の決まった華国鋒前首相の来日の機会も利用させていただき、日本の要人からホッケー部訪中の依頼をしてもらった。まさに〝喪服外交〟に割り込んだかたちでもあった。

しかし今回の企画は何分にも突然だったために中国側も大いに困惑したようだ。学習院ホッケー部の実力はもとより、中国のホッケーそのものに対する認識もまだ極めて稀薄だった。と同時に予想どおり宿泊施設の不足が難問題として浮かび上ってきた。私たちは雨露が凌げれば結構と思っていたが、中国側はそう考えていなかった。日本から初めて学生の単独チームが訪中する以上、一流のホテルを用意して迎えたい気持ちがあった。従って８月の予定を６ヶ月延期してほしいというのである。遠来の客に対して最高の礼で持て成したいという中国の配慮に感謝しつつも、それでは４年生諸君が卒業、就職の準備で参加できなくなるのでなんとか当初の予定どおり、８月にしてほしいとネジ込んだ。中国の駐日大使館員もその執拗さと強引さに苦笑しながら快諾してくれた。

さあ、本格的に尻に火がついた。飛行機の時間も決まった。高校生諸君の参加もＯＫだ。学校側も諒解した。土産の選定も終えた。現地での模様を取材してニュースとして日本へ流してくれるようＴＶ朝日北京特派員にも手を打った。中国選手へユニホームをプレゼントすべく、㈱デサントさんから三チーム分の立派なユニホームも寄付してもらった。そしてアッという間に後輩諸君は中国に向け飛びたっていった。

正直のところ私は彼らが羨しかった。開かれた中国を自分自身の目で確かめられるのだ。中国の人たちが一体何を考えているのか直接会話もできるのだ。とてつもなく大きな国だけに群盲象をなでるに等しいかも知れないが、それも極めて貴重な体験である。

―彼らが中国にいる間中、何回か夢をみた。広大な中国の草原で白いボールを

追ってスティックを振るっている若者たちの群像である。何故かその中に私もいた。学生と一緒になってボールを追っているのである。足がやたらに軽く、まるで鹿のようだった。しかしいくら走ってもゴールがみえない。そのうちボールも見失い、一人ぼっちになったところで目が醒めた—。

そして8月11日、彼らは意気揚々と成田空港に帰って来た。夜もだいぶ更けていたが、彼らのはずんだ声を受話器を通して聞いた時、思わず長嘆息した。どうやら彼らが中国へ行っている間、私の心もそちらに飛んでいたようだ。だから今回は太田胃散のお世話にならなくてよかったのかも知れない。

それにしても私の女房は怪訝な顔をして言ったものだ。「何故海外遠征にそれだけ情熱を燃やすの？」面倒くさいので「別に」と答えたものの、その心の底には、私が大学二年の時（２２年前）、マレーシアに遠征する計画があり、それが何故か中止になってしまったこと、その時の〝怨念〟がいまだに息づいているからだと思っている。

末筆になったが、今回の遠征について、二階堂進自民総務会長、評論家戸川猪佐武氏、そして多くの諸先輩のご協力に、衷心よりお礼申し上げたい。

あ　と　が　き

飛田　孝

日本文化の原点である中国との親善試合、この蠱惑的な企画を思い立ったのは、２年前パキスタンユースチームが中国からの帰りだといい、日本へ立寄ったときのことである。それまで中国にホッケーチームがあるとは夢にも思わなかった。折柄の中国ブーム、日本と中国が最初に試合をするのは、何としても学習院にしたいと、心に決めた。とはいうものの海外親善試合は、思い立ったから直ぐに実現できるものではなく、相手国の了承・学生の実力・学校やＯＢの援助等の全ての条件が整わなければならない。その上に私は監督でも役員でもない。それもホッケーとは事実上縁が切れてしまった単なるＯＢに過ぎないから、更に難しいと思った。したがって形而上的な目的を達するための努力で一寸無理かな、がいつわらざるところであった。

そして一年後、やはりたぎる気は押えられず、韓国のときと同様に、溝口さんに相談したところ、相当に胸に秘めるものがあったらしく、絶対に実現させるから、中国との折衝以外をカタチにしろといわれ、快諾してくれた。一方野崎・横溝・竹口君等の若手ＯＢも快く承知し、学生もぜひとも中国ということで、何と思い立ってから１年半後には、陽の目を見るところまできてしまった。そして創部50周年と、更によい条件が重なった。

前回の韓国行は、試行の連続ゆえにいくつかの反省点があったので、今度は上滑りを戒め、慎重に一つ一つの問題を解決し、仮初めにも中途半端な対処は厳に慎んだ。特に町尻・上田・黒川・中村・内藤さん等の諸先輩の援助と指導は懇切丁寧で、このため難関の資金面について、想像をはるかに超える援助金をいただけることになった。一方選手強化も小林先生・明治大学・ＦＨＭＣ・若手ＯＢから格別の指導を受け相当の成果があがった。

しかし中国での戦績は、私の指導及ばず選手の持てる力を出し切れずに、全敗してしまい、選手諸君に多大な迷惑をかけ申訳なく思っている。海外親善試合は、強行日程から実力が、六分四分で上廻らなければ勝てないことを知りつつも、また評判通り中国の各チームの方が実力が上で、これを乗り超えることは適わなかった。

これで監督として、外国チームと８戦全敗という惨めな記録を残すことになった。とはいうものの、８戦もできた極めて恵まれたホッケー生活を過せたのは本当に幸せである。これもＯＢ諸兄、選手諸君そして溝口さんのような素晴しい友人との出会いがあったおかげである。

最後に忙務この上ない身にもかかわらず、我々に生涯最大の思い出を与えて下さった二階堂進先生、そして幾多の歴史が通り過ぎ、また感動的な発展を遂げようとしている中国の方々に深く感謝します。

追　記

訪中にあたり、特段の援助を賜った松村房雄・桐原武男・デサント・トンボ鉛筆そしてＯＢ諸兄の皆様に心からお礼申し上げます。

学習院大学ホッケー部と中華人民共和国の各大学ホッケー部との親善試合について

1. 目　的

我国と中華人民共和国（以下「中国」という。）とは、有史以前から密接な友好関係にあり、特に我国の文化の根底を成すものの多くは、中国から渡来し、あるいは学んだものであります。しかし、この長い友好関係の中には、地理的にも地政的にも余りに近かったため、いくつかの不幸な関係の時代があったことも厳粛な事実として、認識しています。

しかしながらこの不幸な関係は昭和４７年９月２５日田中角栄元総理、二階堂進元官房長官を始めとする諸先生の訪中により解消し、そして過去を乗り超えた新しい日中関係の歴史が始まりました。

私達若い世代は、この過去を乗り超えた新しい日中の歴史を更に発展させ、理解と信頼に基いた友好を是非とも築きあげていくことが、その使命であり責務であると思っています。

学習院大学は、建学精神に国際交流を積極的に推進し、真の国際人を育成し、ひいては世界平和に貢献すべきであると明記しています。加えてフィールドホッケー部は、既に創部50周年を迎え、関東学生ホッケーリーグ一部で長く活躍しており、実力的にも歴史的にも輝かしいものであると自負しています。又、学業においても、伝統的に中国語を専攻している学生が多い部でもあります。

したがいまして、かねてから中国を訪問し、ホッケーを通じ私達若い世代同士の友情と信頼と理解を深めたいと念願しています。

確かにホッケーは、我国では普及率の低いスポーツであり、中国でも同様であると聞き及んでいます。このため、直ちに大きな友好と親善が芽生えると思ってはいませんが、普及率の低いスポーツだからこそ、相互の精神と技術を錬磨することが多く、むしろ真の友情や理解の度は、早くより大きなものが生まれるのではないか、と確信しています。

又、私達は単にホッケーを通じてのみ友好を推進するのではなく、長い歴史に育くまれた中国の広大な大地に直接に触れることにより、中国の素晴しい

文化、伝統を学び採り入れ、それをこれからの人生の成長の糧としていきたいと考えています。

2. 希望訪中期間

1980年8月上旬　（8月3日～11日）

3. 訪中選手団

団　長	飯坂良明	学習院大学法学部教授 東洋文化研究所所長
副団長兼監督	飛田　孝	日本道路公団
副監督	野崎博典	日新製糖
総主事	横溝宏昌	英恵商会
主　事	竹口友章	ちくま味噌
主　将	高井通昌	経営学科4年
副　将	菊地　誠	法学科4年
主　務	高橋　直	経営学科3年
副　務	高木和彦	法学科3年
	奥寺道彦	山富商事
	小林　進	カインドウェアー
	盛　正樹	経営学科4年
	安養寺　透	法学科4年
	津賀保宏	心理学科3年
	後藤敏夫	経済学科3年
	外山寛実	法学科3年
	吉岡　聡	経営学科3年
	青木慶次	法学科2年
	増田卓郎	経済学科2年
	一柳直宏	高等科3年
	水谷吉男	高等科2年
	若松　健	高等科2年
	小沢博人	高等科2年
	小田洋彰	高等科2年
	汲川隆信	高等科2年

昭和５５年７月８日

中華全国体育総会　殿

学習院大学学長
磯　部　忠　正

謹啓　時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

当大学ホッケー部は貴国を訪問し、各大学ホッケー部と親善試合を行ない、大学生相互の交流により両国の親善を一層深めたいと希望しております。

つきましては、ご多忙中のところ誠に恐縮ですがよろしくお取り計らい下さいますようお願い申し上げます。　敬　具

記

日　　程	別紙
試　　合	３～４試合
役員、選手	別紙
戦　　績	別紙

（同文を北京体育学院院長あて送付）

昭和５５年７月２５日

学習院大学輔仁会ホッケー部
部長　飯坂良明　殿

日本ホッケー協会
会長　稲山嘉寛

国際試合実施の件回答

去る６月２３日付貴信にて承認願出のあった北京体育学院の招請による貴チームの中華人民共和国訪問の国際試合の実施については、貴方計画通りの内容にて実施差支えないので、ご了承の上よろしくお取計い下さい。

なお、国際試合の実施に当っては、別添「国際試合取扱要領」に則り遺漏なきよう諸事取進められたく、また、試合終了後は報告方よろしくお取計い願いたい

以　上

昭和５５年６月２３日

日本ホッケー協会

会長　稲　山　嘉　寛　　殿

学習院大学輔仁会ホッケー部

部　長　　飯　坂　良　明

監　督　　野　崎　博　典

主　将　　高　井　通　昌

海外親善試合の実施について（申請書）

時下ますますご清祥の事とおよろこび申し上げます。

当部の運営につきましては、平素から格別のご配慮を賜り厚く御礼申し上げます。

さて、当部は駐日中華人民共和国大使館の後援により北京体育学院の招請を受け、下記により親善試合を行いたいと思いますので、よろしくお取りはからいをお願い致します。

なお、本親善試合は予定でありますことを念のため申し添えます。

記

訪問国　　中華人民共和国

期　間　　昭和５５年８月２日(土)より８月１０日(日)まで

目　的　　親善試合及び交流

参加者　　部長、監督、役員５名、選手２０名

費　用　　総額　6,０００,０００円

（同文の写しを東京ホッケー協会会長に送付）

（第一戦）

'80 8月5日 16:00 ブリーオフ於北京体育学院ホッケー場　天気晴 観衆550

2 { 0 − 5 / 2 − 2 } 7

学習院ホッケー部			内蒙古自治区曲棍球隊		
No.	競技者氏名		競技者氏名	No.	
1	菊地　誠	GK	王　敏	1	領隊　金関鎖
2	奥寺　道彦	RB	郭永保	4	教練　尹玉峰
3	野崎　博典	LB	徳立英	3	孙　岩（兼）
4	高橋　直	RH	孔慶杰	13	隊長　敖拉柱
5	外山　寛実	CH	于江軍	5	
6	青木　慶次	LH	徳樹立	6	
7	小林　進	RW	張慶禹	7	
8	安養寺　透	RI	孙　岩	9	
9	盛　正樹	CF	郭旭東	17	
10	高井　通昌	LI	芬　英	10	
11	横溝　宏昌	LW	沃永福	16	

F・H41, L・C3, P・C4, P・S0,
得点 2

交代者　高木（青木）増田（小林）
津賀（横溝）

F・H16, L・C3, P・C3, P・S0,
得点 7

交代者　敖拉柱（郭永保）孟慧臻（張慶禹）郭亜青（孙岩）沃永廷（郭旭東）徐波（沃永福）

〔記　事〕

（前半）10分　芬英（LI）のアシスト（左よりセンタリング）により孙岩（RI）得点
16分　張慶禹右からドリブルシュートにより得点
20分　P・C（玉出し芬英ストップ郭永保、シュート于紅軍）により得点
21分　サークル内の混戦から郭旭東が得点
26分　孙岩のアシスト（サークルトップでのフラットパス）により芬英得点

（後半）10分　津賀のアシスト（左よりセンタリング）により安養寺得点
20分　クリアーミスを沃永廷シュート得点
32分　郭亜青が縦パスを徐波へ得点
35分　盛正樹のアシスト（サークルトップで右からのフラットパス）を津賀得点

（第二戦）

'80 8月6日 16:00 ブリーオフ 於北京体育学院ホッケー場 天気晴 観衆650

0 〔0－0 / 0－3〕 3

学習院ホッケー部　　北京体育学院曲棍球隊

No.	競技者氏名		競技者氏名	No.	
1	菊地　誠	GK	白丹竹	3	領隊　候正慶
5	外山　寛実	RB	劉金禄	2	教練　宋邦新
2	奥寺　道彦	LB	鐘林栄	13	隊長　鐘林栄
13	高木　和彦	RH	鮑跃順	14	副隊長　楊利生
4	高橋　直	CH	劉　翔	5	
3	野崎　博典	LH	張全明	10	
14	吉岡　聡	RW	王金松	7	
8	安養寺　透	RI	李炳宏	4	
9	盛　正樹	CF	李東平	6	
10	高井　通昌	LI	楊利生	9	
12	津賀　保宏	LW	尤宝東	11	

F・H39 L・C2 P・C2 P・S0　　F・H45 L・C3 P・C6 P・S1

得点 0　　得点 3

交代者 青木（野崎）

〔記　事〕

（後半）１１分 P・Sにより楊利生得点

１４分 中央より持ち込まれ、楊利生右側よりシュート得点

１９分 P・Cより楊利生のシュートをＧＫはじき、王金松がたたき得点

（第三戦）

'80 8月8日 16:00 ブリーオフ 於内蒙古、大馬路体育場

天気曇のち晴 観衆 20,000

1 〔0－1 / 1－3〕 4

学習院ホッケー部			内蒙古自治区曲棍球隊	
No.	競技者氏名		競技者氏名	No.
1	菊地 誠	GK	王 敏	1
5	外山 寛実	RB	郭 永 保	4
3	野崎 博典	LB	徳 立 英	3
4	高橋 直	RH	孔 慶 杰	13
2	奥寺 道彦	CH	于 江 軍	5
6	青木 慶次	LH	徳 樹 立	6
7	小林 進	RW	張 慶 禹	7
8	安養寺 透	RI	孙 岩	9
9	盛 正樹	CF	孟 慧 臻	8
10	高井 通昌	LI	芬 英	10
11	横溝 宏昌	LW	徐 波	11

F・H24, L・C4, P・C2, P・S0,
得点 1

F・H15, L・C4, P・C6, P・S0,
得点 4

交代者 吉岡（小林）津賀（横溝）

〔記 事〕

（前半） 3分 P・C（玉出し芬英 ストップ郭永保 シュート于江軍）
于紅軍がトップ、横にながし徐波シュート得点

（後半）13分 トップから右側へドリブル、逆サイドポストシュート得点

17分 クリアーミスから芬英がトップで拾い左にふる徐波トラップシュート得点

18分 ブリー直後左側から速攻、トップでキーパーをかもりそのままゴールへ得点

28分 P・C（玉出し安養寺 ストップ盛 シュート高橋）キーパーのレガートをはじきゴール得点

（第四戦）

'80 8月8日 17:30 プリーオフ 於内蒙古大馬路体育場

天気曇 観衆20,000

0 〔0－3 / 0－2〕 5

学習院ホッケー部			内蒙古自治区曲棍球隊	
No.	競技者氏名	（25分ハーフ）	競技者氏名	No.
1	菊地 誠	GK	王 敏	1
15	後藤 敏夫	RB	郭 永 保	4
12	竹口 友章	LB	徳 立 英	3
4	小沢 博人	RH	孔 慶 杰	13
13	水谷 吉男	CH	于 紅 軍	5
6	小田 洋彰	LH	徳 樹 立	6
14	増田 卓郎	RW	張 慶 禹	7
10	高木 和彦	RI	孙 岩	9
9	一柳 直宏	CF	孟 慧 臻	8
8	若松 健	LI	芬 英	10
11	汲川 隆信	LW	徐 波	11

F・H27, L・C0, P・C5, P・S0,
得点 0

F・H22, L・C1, P・C2, P・S0,
得点 5

〔記 事〕

（前半） 3分 孙岩得点
12分 于紅軍得点
17分 徐波得点

（後半）10分 于紅軍得点
13分 徐波得点

学習院大ホッケーが中国遠征

学習院大ホッケーチーム（関東大学リーグ一部）２５人が日本ホッケー史上初の中国遠征を行う。３日に出発、１１日まで北京体育学院チームや内蒙古チームなどと３、４試合を行う。

＜中国のホッケー＞

８月上旬に世界ホッケー連盟に加盟予定の新興国。海外交流もパキスタンのみで学習院大チームが二度目。

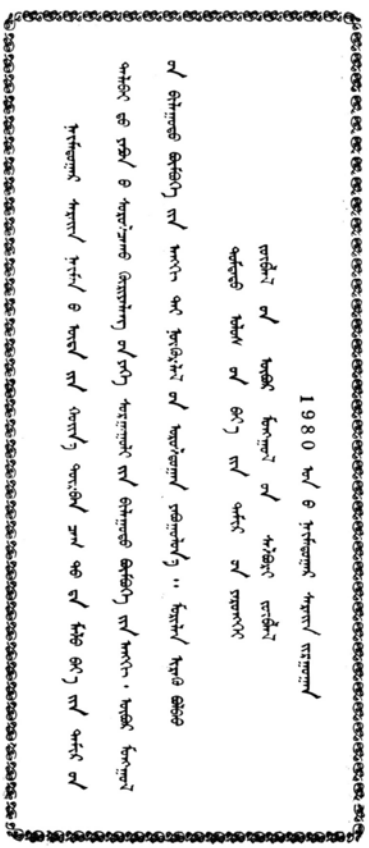
※　８月１日付　日刊スポーツ　　掲載

内蒙古招待券

日本学习院大学曲棍球队八月八日下午四时在大马路体育场与内蒙古队进行友谊比赛，敬请光临。

中华体总内蒙分会

一九八〇年八月六日



援助者名簿（部友等）

（敬称略・順不同）

松村房雄	100,000円	アメリカン・フットボール部
F・H・M・C TOKYO	30,000円	準硬式野球同好会
ちくま	10,000円	バスケット・ボール部
永谷郁夫（学習院大学生）	5,000円	弓道同好会
町田卓也（学習院大学生）	5,000円	ダイビング愛好会
渡辺俊男（学習院大学生）	3,000円	航空同好会
高校訪中選手父母	60,000円	馬術部
増田尚（学生・増田父）	10,000円	ソフト・ボール部
日本ホッケー協会	マスコットステック	水泳部
デサント	ユニホーム45着	柔道部
桐原武男	ペナント	アイス・スケート部
トンボ鉛筆	名入ボールペン400本	剣道部
川島英雄（明治大学OB）	ストッキング止め25本	バレー・ボール部
学習院大学	学術書一式	空手道部
森永製菓	スポーツドリンク150本	フェンシング同好会
女井良久	洋菓子	スキー部
日新製糖	砂糖（ペット・シュガー） 20kg	応援団
山富商事	インスタントみそ汁5箱	軟式庭球同好会
津賀メリヤス	スポーツソックス 25本	山岳部
アラン文具	フィルム 20本	ラクビー部
城和興	フィルム 20本	水上スキー同好会
		竿友会愛好会
		集会所売店（紅楽）
		硬式野球部
		サッカー部
		自動車同好会
		あるける愛好会
		音楽部
		硬式庭球部

援助者名簿（OB）

（敬称略・順不同）

鶴見英彦
上野毅弘
南部直光
鈴木英介
山下行雄
観世元道
木越安興
熊野修孝
植田信久
上野照博
野口修男
手塚紀彦
大久保幸俊
黒田　宏
丹沢利一
女井良久
岩立和雄
成沢一憲
鈴木章太郎
福田仁蔵
池田幸雄
野口　享
山田　実
長井広司
松村　豊
釈　洋一
亀田尚裕
福本雅夫

五十嵐正治
中村路一
山田義元
渋谷在正
大木基影
町尻量光
浅田俊二
橋口倫介
武者小路公久
小原量福
松永正治
室町公範
渡辺広海
上田宗良
緒方幸三
観世元信
黒川真幸
大島護久
本田春義
大橋啓一
小泉　修
杉浦寛彦
水田二郎
小坂　登
桐谷長春
田倉　忠
柴田幸雄
山崎恭弘

薦野　潔
渡辺一幸
大谷　修
安倍一雅
白沢利昭
片桐　純
宮島忠雄
井上英利
種田久人
桜井直己
松平忠久
荘司雅一
藤村昌苗
藤村公苗
深谷弘士
関谷　隆
溝口泰男

以上　73名

決　算　報　告　書

支出		収入	
項目	金額	項目	金額
1. 交通費	3,605,000	1. 寄付金（OB）	807,000
2. 出国手続費等	115,608	2. 寄付金（一般）	422,650
3. 宿泊費（成田）	126,060	3. 個人負担金	4,825,000
4. 記念品代	221,500	4. 合宿費等援助金	500,000
5. 滞在費	1,900,000	5. 部費	50,000
6. ユニホーム費	184,800		
7. 雑費	451,682		
合計	6,604,650	合計	6,604,650

編　集　後　記

「ナニやってんだい!!」と怒鳴る飛田さん。イジワルの好きな横溝さん、マイペースで仕事をする竹口さん、そして「高橋、タノムようっ」と盛さん。

５人で集まり、アーでもない、コーでもない、と編集会議は続く。帰りはいつもタクシー乗場まで、酔った中年と競争だ。面倒くさい。疲れる。「何でこんな思いを……。」と思う。

でも私は知っている。成田から飛び立つ時、それまでの準備の苦労や辛かった事が全て喜びと変わった感激を、充実感を。

一つの事を思いつく。計画し、実行し、後始末をし、そして完成させる。そこには多くの人々の犠牲や、惜しみない援助と努力が一杯詰まっている。それ等は私にとって、大いなる勉強となり、想い出となり、貴重な財産となる。

韓国遠征から８年。今、念願かない中国遠征は終った。そこで創られた素晴らしい想い出は、眩しい程の輝きを放っている。その輝きは同時に、我ホッケー部のものでもある。私達は確実に５０年にわたるホッケー部の歴史に新しい１ページを加えた。そして、その事を心に深く刻み込むと共に、その１ページが破れない様に、これから努力・精進していかねばならない。それが、素晴らしい体験をした私達の使命であると確信している。

そして今……静かに煙草をふかす飛田さん。メロディー電卓を奏でる横溝さん、椅子に踏ん反り返っている竹口さん、そして第二の人生へ羽撃く盛さん、来年のＤＦの要となる濱口君……がいる。

「本当にありがとうございました。」

この遠征にあたって最良の指導者であった飛田さんに、心から感謝します。

―ホッケー部一同―　（直）

北京蒼天　棍球親善

1980年11月11日発行

編　集　盛　正　樹
高　橋　直
濱　口　孝　文

発　行　桜　杖　会

印　刷　芝サン陽印刷有限会社